

元勇者と元魔王の気ままな旅路

鬱ヶ口

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

かつて殺しあつた勇者と魔王は別の世界で再び出会う。

しかし出会って数分で嘗て自分達が生きた世界に呼ばれるは、世界を救つてくれだは、ふざけんな!!

これはそんな二人が世界の危機とか気にせず適当に旅をする。

これは、そんなお話。

基本作者は何も考えてません!

この作品が続くかもわかりません!

更新は超不定期です!

あと、作者は絶望的なまでの豆腐メンタルです。用法、用途を守つて優しくしてください。

目次

一つの終わり	1
新たな始まり	5
召喚された理由	11
真の再開	16
職業判定	21
『忘れられた英雄』	27
決心	31
逃亡	36
作戦会議？	41
戦闘開始	47
戦闘1	52
戦闘2	58
終戦	64
旅立ち	72
旅立ち	81
桃花side	

一つの終わり

そこはかつて魔王城だった場所。今は見る影もなく、かつて魔王城だった名残があるのみである。

そんな場所で倒れている男女が二人。

男は腹に穴が空き、そこからとめどなく血が流れている。女は上半身と下半身が離れており、上半身の片腕は無い。どちらも見るからに致命傷を負っており、未だに息がある事の方が不思議なほどであった。

しかしそんな二人は互いに笑みを浮かべていた。

「は、はは。どうだ？殺してやったぞ、魔王」

血を吐きながらもそう言った男の言葉に、魔王と呼ばれた女は何も答えない。

「……なんだもう死んだのか？存外呆気ないもんだなあ」

「……」

「……おい。マジで死んだのか？死んでんだったら返事しろヤクソ女」

しかし、女からの返事はなかった。

そこで男は最終手段に出た。それに反応しなければ本当に死んだのだと諦めることにしたのだ。

「……邪気眼籠」

「……ヴッ!？」

……女から何かうめき声のようなものが聞こえた気がするが、まあ気のせいだろう。

「……神魔をも滅する聖なる白き獄炎をもって、あらゆる不浄を消し去らn」

「うがあー！やめい！やめるのじゃあー！」

そこでどうとう我慢の限界がきたのか女からの制止の声が上がる。

気持ち的には今すぐ転げ回りたいのだろうが悲しいかな下半身は無く、片腕もない不自由なその身ではその場で悶えることしか出来ない。

「貴様――人の忘れたい過去を掘り返しおって！血も涙もないのか!?」

「ハッ！てめえが死んだふりなんてすんのが悪いんだよ！」

「……つうか、聖なる獄炎でなに？聖なるものなのに神を滅するの？獄炎なのに魔を滅するってなんで？」

「うるさいうるさいうるさい！そもそも、こっちは死に体なんじやぞ！もう少し労ろうとかそういう優しさはないのか!?このエセ勇者！」

「俺はその称号に全く思い入れはないからな。それを言われても全く傷つかん」

「ぐぬぬぬ……」

恨めしそうな声を出し男を睨みつけようとするが、何度も言うようにその体は死に体である。最早その顔を動かす事も叶わない。

……と、言うよりもこの二人こんな言い合いを元気にしているが、この間も互いに血を吐き顔色はどんどん悪くなっていつている。正直ただの阿呆であった。

「……なあ」

と、そこで男が真剣な声で女に語りかける。

「お前はさ、これで良かったのか？」

「……」

男のその問いに女は答えない。

「もっと他に道はあったんじゃないか？」

「ないよ」

次に放たれた男の問いに女は間髪入れずに答える。

「私が魔王になった時点でもう他に道などなかった。それは貴様の方がよくわかっておるだろうに」

「……」

今度は男の方が答える事が出来ずに黙ってしまふ。

「それよりも、貴様の方こそ良かったのか？」

「……何がだよ」

「こんな場所で、こんな最後で、貴様は良かったのか？もつといい道が

あつた筈じゃ。お主なら」

女その問いに男は笑う。それはもう盛大に。本当に死に体なのか疑うほどに。

「……何故そこで笑う？私にはなにか面白い事を聞いたかのう？」

「いや、悪い。……そうだよな。普通そう思うよな」

男が何を考えているのかはわからない。しかし、その声は明るかった。

「俺はこれで良かったよ。確かに他に道もあつたさ。でもその道を選んだらこんな楽しい事にはならなかつたし、それに……」

「ん？それに、なんじゃ？」

「……いや、なんでもねえよ」

それを最後に男は口を噤む。その対応に女はそれ以上聞くことを諦めた。

暫く辺りを静寂が包み込む。しかし、彼らにとってお互いしかない空間。それこそ、お互い口には出さないうがずっと求めていたものだった。

しかし、そんな時間もすぐに終わりを迎える。

「……そろそろか」

「……そうか」

「ああ」

そう言う男はもう喋ることすら苦しくなっていた。いや、むしろそれが普通なのだ。男は勇者などと呼ばれようと、所詮人間なのだから。

「なあ、最後に聞いてもいいか？」

「なんじゃ？」

男は最後の力を振り絞り、言葉を紡ぐ。

「……また、会えるか？」

その言葉を聞き女は少しだけ無言になる。しかしすぐに口を開き、その問いの答えを言う。

「……うむ。きつと、またすぐに会えるよ」

「……そうか」

その答えを聞き、男は安心したように顔を綻ばせる。

「……じゃあ、また会おう。我が友よ」

「……ああ。また会おうぞ。我が友よ」

そうして、とある二人の人物の一生は幕を閉じたのだった。

新たな始まり

目を覚ます。

久しぶりに見た昔の夢に少しだけ嬉しく思いながら、布団から出て学校に行く準備を始める。

俺の名前は桜木さくらぎ 空そら

前世の記憶がある事以外は普通の高校生……の筈だ。うん。身内にたまに化け物を見るような目で見られる事があるけど普通の筈。

そんな俺が前世の事を思い出したのは俺が五歳になった日。夢で前世の俺の一生を見た。いや、思い出したと言った方がいいのかもな。

でも、それからは大変だった。人一人分の一生を数時間足らずで見たせいなのか俺は高熱を出し救急車で病院に運ばれたため、両親と妹には心配をかけた。しかもそのあとそれまでと違った雰囲気と喋り方をする我が子を見た両親の反応は、まあ推して知るべしと言うやつだろう。それでも、それまでと変わらずに接してくれた両親と妹には感謝してもしきれない。

「兄さん、まだ寝てるの？遅刻するよー」

「おーう。今行くー」

俺を呼ぶ声にそう答え、階段を降りてリビングに向かうと長い黒髪を腰まで伸ばした、俺と同じ制服を身につけている少女が先にご飯を食べていた。

「おはよう、桃花とうか」

「うん。おはよう、兄さん」

そうやって俺に笑顔を向けるのは妹の桜木 桃花。俺の一つ下の妹だ。桃花は容姿端麗、文武両道を絵に描いたような完璧超人である。

正直俺にはもったいないほどできた妹で兄である俺の立つ瀬がない。

ちなみに両親は今外国にいる。親父が外国に出張で母さんはその付き添いだ。

「どうしたの兄さん。そんな所でボケっとして。早く座りなよ」
「ああ、悪い。ちよつと考え事してた」

俺は桃花の前の椅子に座り朝食を食べ始めようとして大事な事を
思い出した。

「そうだ。桃花」

「ん？どうしたの？」

「改めて、入学おめでとう」

「……ありがとう」

そう言うのと桃花は少し頬を染めてそっぽを向いた。

いやー、思い出せてよかった。そうして今度こそ朝飯を食べようと
口を開く。

「ところで兄さん」

「ん？」

「今日って二、三年は私たち新入生より早めに行かないといけないん
じゃなかったっけ？」

「……あ」

桃花にそう言われ時計を見ると、急いで出ないと遅刻する時間
だった。

「うっそだろ、おい!」

「やっぱりやばかったんだ」

分かっていたならもつと早く言って欲しかったぞ、妹よ！

朝食を急いで食べた俺は近くに置いてあったカバンを手に取り、玄
関をへ向かう。

「忘れ物ないよね？」

「おう。多分無い、筈」

「……心配だなあ」

「まあ、大丈夫だろ。始業式しかないし」

「まあ、それもそっか」

そこで桃花は何かを思い出したのか、あつと小さな声を出す。

「どうした？」

「……あー、うん。えつと」

「なんだよ」

「帰ってきたら一戦やりたくなつて」

そう言つて桃花は恥ずかしそうに顔を伏せる。

桃花の言う一戦とは木刀を使った試合だ。これだけが唯一俺が桃花に勝てるものだったりする。他のもの？完敗ですけど何か？

「いいぞ。どうせ今日も俺が勝つけど」

「ムツ。今日こそ私が勝つもん」

普段見せないむすつとした顔でそう言う桃花に自然と笑みがこぼれる。

「そうだといいな。じゃあ、行くわ」

「うん。いつてらっしゃい。また、あとでね」

あの後、なんとかギリギリ遅刻せずに学校に着くことができ、その後も特に問題もなく始業式が行われ今は帰りの連絡の時間……の筈なのだが担任が来ない。もう十分ほど経つのだがどうしたのだろうか？

「兄さん」

あまりにも暇だったので窓の外をぼうつと眺めていると、聞き覚えのある声がした。

声のした方を見ると思った通り桃花がカバンを持ってそこに立っていた。

「おう。桃花か。どうした？」

「どうした？じゃないよ。ずっと待ってるのに全然来ないんだもん。だから私の方から来ちゃった」

「あー、悪い。まだ帰りの連絡が終わってなくてな」

「終わってない？先生いないじゃん」

「帰って来てないんだよ。だから待ってる」

連絡聞かずに帰ると大事な事を聞きそびれる可能性もあるので、帰るに帰れない。

と、そこまで話したところで担任が教室に入ってくる。

「いやー、ごめんねえ。ちよつといろいろと手間取っちゃって遅くなっちゃったあ」

笑いながらそう言う彼女。いい先生ではあるんだが、こういう所少し適当なのがなあ。まあ、それも一つの良さではあるんだが。

そんな事を思っていると担任はこちらを、正確には俺の横にいる桃花に視線を向ける。

「あれえ？あなた見ない子だけど誰え？」

「あ、えつと今年新しく入学しました。桜木 桃花です。いつも兄がお世話になってます」

そう言って桃花は頭を下げる。なんてできた妹なんだろうか。

「桜木？ああ。空くんの妹さん。これはこれはご丁寧にどうもおもなんでこのクラスにい？」

「えつと、兄と一緒に帰る約束をしまして。それでなかなか来ないのでこのクラスの様子を見に来たんです」

「ああ。そつかあ。ごめんねえ。私が遅くなっちゃったからあ」

「い、いえ！そんな事ないです！それじゃあ兄さん。廊下で待ってるね」

そう言うと桃花は小走りで教室を出て行った。

先生は今度は俺も見て申し訳なさそうに眉を八の字にしていた。

「ごめんねえ、空くん。すぐ終わらせるからあ」

「いえ。お気になさらず」

俺がそう言うと先生はホツとしたように息をついた後黒板の前に立った。

「えつとお、実は今日から転入生がこの教室に入ってきますう。始業式とかはちよつといろいろあつて間に合わなかったんだけど、さつき来たから挨拶だけさせようと思って連れて来たんだあ」

入ってきてえ。と、先生が言うと教室の前の扉が開かれる。

そうして入ってきた女の姿を見て俺は目を見開く。

光を反射する美しい銀髪を腰まで伸ばし、あらゆるものを見通すような澄んだ瞳。その歩きは堂々としており、ただ歩いているだけなのに不思議と惹きつけられる。現に数分前まで騒がしかった教室は静まり返り、彼女に視線が釘付けになっている。

考えなかったわけじゃない。俺がこうして転生しているんだ。もしかしたら彼女もなんて幾度となく考えた。だけど、自分の出来るあらゆる手を使って調べたが見つけることは出来なかった。

だけど、まさか、まさか、彼女は!!

そんな期待を込めて彼女を見てみると、彼女は口を開く。

「はじめまして！永夜^{えいや} 白^{しろ}と言います！これから皆さんと楽しい時間を過ごせたらと考えています！よろしくお願いします！」

俺の内心の驚きをよそにそう笑顔で言っただけで彼女は頭を下げる。その姿に周りから暖かい拍手が送られる。

しかし、俺の心には冷たい風が吹いていた。

……違う。俺の知るあいつは……、

あんな人当たりが良さそうな超絶美少女じゃない！

俺の知るあいつは超自己中だし、あんな元気いっぱいな奴じゃなかった！

コミュ障で阿呆で中二病で根暗なあいつがあんな風になるわけが……。

ヒュン!!

そこまで考えた所で俺の顔の真横を何かが通り過ぎて行った。後ろを見ると白いチョークが壁に当たり粉々になっていた。前を向くと永夜と名乗った転校生が手を振り抜いていた。その姿に先ほどまで拍手をしていたクラスメイト達も手を止め驚いた顔で転校生を見ている。

その転校生はこめかみをヒクつかせながら笑みを浮かべている。

「……ごめんなさい。なんだかとても失礼な事を言われたような気がしたから」

……はて？ さっぱり心当たりがない。

しかし、見ず知らずの相手にいきなりチョークを投げてきたのだ。

ここは一言言つてやるべきだろう。

そう思い、口を開こうとした時だった。

……突然教室全体が光に包まれた。

「な!? これは!」

「……なぜこの術式が?」

俺と転校生の声は突然の事に騒ぎ始めたクラスメイトの声にかき消される。

その光はどんどん強くなっていく。それに比例して教室の声も大きくなっていく。

そして光が視界全てを覆い尽くしそうになった時だった。

「兄さん! 何が起こつて」

その言葉を最後に俺は、いや、俺を含むあの教室にいた者達は全員その世界から姿を消した。

召喚された理由

……さん。

声が聞こえる。聞き覚えがあるような……。

「……いさん」

……まあ、誰でもいいか。眠いし、もう少しだけ。

「……兄さん、いい加減起きないとぶっ殺すよ」

その声を聞き俺の意識は急浮上した。

体を起こすと冷めた目で見下ろす桃花がいた。

「……おはよう。遅いお目覚めだね。兄さん」

「……お、おはよう。あの、桃花さん？今のとは？」

「なかなか起きないからさ。効いたでしょ？」

「……はい」

……声がマジだったぞ、妹よ。久しぶりにあんな殺意浴びたわ。

桃花の冷めた視線から目を逸らした所で、俺は初めて周りの景色に意識を向けた。

「てか、ここ何処よ？」

「……わかんない。気づいたらここにいたから」

不安なんだろう。少し怯えたような顔で桃花がそう言った。起きている他のクラスメイト達も皆似たような表情を浮かべている。

周りは豪華な装飾のされた柱が立ち、壁にも同様の装飾がなされている。後ろを見れば大きな扉があり、前を見れば玉座がある。

そして、その玉座に座る一人の男。その右斜め後ろには豪華なドレスを着た俺らと同年らしき女が一人。

そして俺がその二人に視線を向けると同時に男が口を開く。

「ようこそ、異世界の者達よ」

そう言う男は立ち上がりこちらに近づいてくる。

「私はこの国の王であり、そなた達をこの世界に呼んだ者でもある」
王と名乗った男が語った事にクラスの奴らは皆驚いた顔をする。

さらに男は言葉を続ける。

「そなた達の中にはどうして呼ばれたのか、何故自分達が？と考える

者もいるだろう。しかし、どうか落ち着いて私達の話聞いてほしい」

「ぎっけんな！」

「おい、よせ！」

王がそこまで話した所でとうとう我慢の限界がきたのだろう。クラスの男子の一人がそう声を荒げた。近くの友人と思しき男が止めようとするがその男子は止まらない。

「いきなり知らねえ所に連れてきた挙句に、わけわかんねえ事抜かしやがって！さっさと俺たちを返せよ！」

その男子の言葉に王は申し訳なきような顔をする。

「……すまぬ。今はできぬ。しかしその理由もこれから話すのでどうか話を……」

「ぎっけんな、クソがあー！」

そう言つて男子が王の胸ぐらを掴もうとした瞬間、男子はどこからか現れた黒いマントで全身を覆った何者かに組み伏せられる。

「あ、がっ」

「……王への暴言に加え、王の話を守るなど万死に値する。死ぬ」

その何者かはそう言うと言った手に持った刃物を男子に振り下ろす。

「よせっ！」

しかし、その刃物は王が発したその言葉により男子の首を刺す寸前で止まる。

「その者が怒るのも当然だ。我々はその怒りを受け止めねばならん」

「……御意に」

そう言つて刃物を収めるとそいつは音もなく姿を消した。

あと少しで死にそうになった男子は恐怖からか、その場からすぐに離れると体を震わせて縮こまってしまった。

「すまなかつたな。我が家臣は少々敏感でな」

「……いえ。今のはこいつにも非はありました。話の続きをお話しください」

体を震わせる男子の代わりに、先ほど男子を止めようとした男がそう答えた。

「うむ。では、カノン。あとは頼むぞ」

「はい、お父様」

王の後ろに控えていた女はそう言うと、数歩前に出た。そして俺たちにお辞儀をする。

「皆さまはじめまして。私はこの国の王女、カノンと申します」

そう言つて笑顔を向ける彼女にクラスの殆どの男子は熱い視線を向ける。

「まず始めに皆さまに改めて謝罪を。こちらの都合で皆さまをこんな世界に連れてきてしまった事、誠に申し訳ございませんでした。」

しかし、こちらにもやむにやまれ事情がございます」

「……あのお、その事情つて？」

そこで初めて俺たちの中で唯一大人である先生が疑問の声を出す。

「はい。実は、この世界は今前代未聞の危機に瀕しているのです」

彼女のその言葉にクラスの奴ら全員が首を傾げる。まあ、いきなり危機に瀕しているなんて言われても平和な世界で生きてきた彼らにはピンとこないだろう。

「数年前、突如この世界に魔王を名乗る者が現れたのです。彼らは暴虐の限りを尽くし、私達人族の他にも様々な種族が沢山の同胞を亡くしました。そこで、生き残っている種族の代表達で話し合い異世界からこの世界を救える勇者を連れてくる事にしたのです」

彼女は話の途中で目尻に涙を浮かべるが、話の最後には俺たちに希望に満ちた視線を向ける。

「そして今日、とうとう異世界からあなた方を召喚することができたのです」

その言葉にクラスの奴らはざわめき出す。

「魔王つてなに？」

「勇者つてわけわかんない」

「異世界召喚キタコレ！」

などなど各々が思った事を口に出している。

「もちろんこちらの勝手な都合である事は理解しています。ですが、ですが！どうか、皆さまの力を我々に貸して下さい。お願いします」

！」

そう言つてもう一度彼女は頭を下げる。

その姿を見たクラスの奴らは困つたように周りの奴らと顔を見合わせている。そんな中、一人の男が前に出てくる。そいつは先ほどからちよくちよく口を挟んでいる男だった。

「顔をあげて下さい。王女さま」

「……あなたは？」

そいつは彼女のその問いに笑みを浮かべた後、クラスの奴らの方へ向き直ると口を開く。

「皆、俺は彼女の、いやこの世界の為に戦つてもいいと思う。確かにいきなりこんなわけわかんない事に巻き込まれて戸惑つたり、怒りを覚えることもあるだろう。でも、困っている人がいるのなら助けてあげるのは当たり前のことじゃないか！」

そいつのそんな言葉を聞いて何人かは何故か覚悟を決めたような顔になる。

しかし、それでも殆どの者は不安そうな顔をしている。

「でも、もしかしたら死んじゃうかもしれないんだよ？私、怖いよ」

クラスの女子の一人がそんな事を言う。しかし、前に出た男は何故か微笑むとそう言つた女子の前に立つ。

「確かにそうかもしれない。でも、大丈夫だよ。俺が皆を守るから」

そう言う女子の頭のを撫でる。……あー、これが撫でぽってやつですか。あの、かつこイケメンに限るですか。わあ、初めて見たなー（棒読み）。

事実撫でられた女子は頬を染めると、「じゃあ頑張ろっかな」なんて言い始めた。うわあー、すげー（棒読み）。

そして何故かそれを皮切りにクラスの奴らが声を上げ始める。

「おっしやあーやってやらあー！」

「冬馬君がそう言うならー！」

「うん、頑張ってみるよー！」

そんな声がいたるところから、てか、あの男冬馬つて言うのね。覚

える気ないけど。

頭を下げていた王女さまはそうした声を聞き目尻に涙を浮かべ微笑む。

「……皆さま、本当に、本当に！ありがとうございます、ございます……！」

その光景は普通に見れば美談なのかもしれない。実際俺の隣にいる桃花も少し目尻に涙を浮かべている。

「……よかった、よかったね、お姫様。ねえ、兄さんもそう思うでしょ？」

「ん？ああ、そうだな。よかった、よかった」

「むっ。なんか心こもってない」

「いや、だってなあ」

そこから先は絶対桃花は怒るから口にはせず、心の中だけで呟く。

……いったい、こんな三文芝居のどこに感動して共感すればいいんだよ？

真の再開

それから暫く王女さまと冬……なんとかが話をしていると、突然王女さまは声を大きくして会話に混ざっていなくなった俺や桃花含む数人にも聞こえるように話し始めた。

「それでは、まず皆さまの職業クラスを見てみようと思います」

彼女のその言葉に、当たり前だがクラスのほとんどの奴は首を傾げる。

王女さまはそうなるのがわかっていたのか軽く微笑んだ後、職業について話を始めた。

「この世界には神から与えられた職業というものが存在しています。この職業は多岐にわたり、村人や戦士、稀にはありますが剣聖や賢者と言われるクラスも存在します」

その言葉を聞き、クラスの奴らは再度ざわめく。向こうの世界にはないものだから興味があるのだろう。

「そして、この職業にはそれぞれにスキルというものが存在します。例えばですが戦士などには〈剣術〉や〈槍術〉など戦いに必要なスキルを。村人には〈農業〉などですね」

彼女がそこまで言うとは何か呪文を唱える。すると彼女の手元に水晶が現れた。

「この水晶には職業を調べる力が宿っています。その力を使いこれから皆さまの職業を調べていきますので、私の前に一列で並んでください」

彼女がそう言うのとクラスの奴らは自分の職業を確認しようと王女さまの前に並び始める。

その光景を俺は彼らの少し後ろで眺める。

「兄さんは行かないの？」

「ん？俺は後でいいわ。今凄い混んでるし」

「ふーん。……私にも職業があるのかな？」

「何かしらはあるだろ。自分の職業を知らない奴はいくらかいるが、職業を持たない奴は存在しないからな」

「そうなの？というかなんで兄さんはそんなこと知ってるの？」

「……なんとなく？」

「……ふーん。まあ、今はあんまり聞かないでおくね。でも、あとでちゃんと教えてよ」

それじゃあ、私も行ってくる。桃花はそう言うところクラスの奴らが並び列に混ざっていく。

その光景を見ながら桃花の問いについての答えを心の中で呟く。

……なんでそんなこと知ってるかって、そりゃあ、この世界、俺が前世で死ぬまで戦い続けた世界だし。

もちろんまだ確証はない。でも、職業の事と言い、さつき王女さまが使った〈転送〉の魔法と言い、それに何よりこの空気を知っている。そのことからおそらく、かなり高い確率でこの世界はあの世界だろう。

いったいなんの因果かわからないがまたこの世界に来ることになるとは、人生つてのはわからないもんだな。

「あなたは行かないの？」

俺がそんな事を考えていると後ろからそんな声をかけられる。後ろを見るとそこには転校生の永夜と名乗った女がいた。

「それはこっちのセリフなんだが？」

「私はあとでいいよ。今は面倒だし」

「へえ、意外だな。お前みたいな奴は友達とワイワイしながらやるもんだと思ってた」

「まだ、転校してきて数十分しか経ってないのに友達なんいるわけないじゃん」

あー、それもそうか。そういや、挨拶してすぐこっちに飛ばされたんだもんな。

「お前も大変だな」

「まあね。でも、会いたい人にも会えたからいいよ」

「ふーん。知り合いでもいたのか？」

俺がそう言うところ少し頬を膨らませる。

「どうした？」

「……やっぱり気づいてないか」

「はあ？」

その言葉から考えるにそいつの知り合いは俺なんだろう。しかし、俺はこんな明るい奴と知り合いになった覚えはない。見た目は俺が知るあいつに似ているが、あいつはどつちかって言うのと隠キヤだし……。

「はあ。お主また失礼な事考えてるじやろ？死ぬか？ん？」

「いや、全然。……って、は？お前、魔王か？」

「やつと気づきおったか。私はすぐ気づいたと言うのに」

そう言つて呆れたようにため息を吐くそいつの喋り方と今の雰囲気は、まさに俺の知る魔王のそれだった。

「まじか。……お前、いつからそんな陽キヤラに」

「お主まじでいっぺん死ぬか？失礼すぎるぞ!？」

おお、この感じ本当に魔王なんだな。

「いや、悪い。性格変わりすぎてて気づかんかった」

「まあ、仕方がないか。私も周りから浮かないように頑張つてあのキヤラを作つておったし」

「苦労してんな」

「……まあ、そこそこな」

そう言つて遠い目をする魔王。まじで苦労してきたんだな。

「コホン。それよりももっと話すべき事があるじやろ」

「ああ、そうだな」

「うむ」

そう言つて少し静かになる。

俺は魔王の次の言葉を待ちながら話すべき事を頭の中で整理する。

そして魔王は口を開く。

「先ほどまでお主の隣にいたおなごは誰じゃ？」

「……は？」

「聞こえんかったのか？お主耳悪くなったんじゃないか？」

「いや、悪くなつてねえよ。それより、は？」

最初に何を言うのかと思つたら隣にいた女が誰か？桃花のこと

言ってるんのか？

「お前それ今話すべき事か？」

「話すべき事じゃろ！私と言う者がありながらあんなに親しそうにしておって！浮気か!?事と次第によつては私は泣くぞ！年甲斐もなく泣くからな！」

そう言う魔王は目尻に涙を浮かべて本当に泣きそうな顔をしている。

……ふむ。

「お前には会つたら言わないと思つてたんだ」

「な、なにをじゃ!？」

……まあ、もしも会えたら紹介しないといけないもんな。身内として。

「あいつはさ、俺にとつて大切な存在なんだ」

家族だし、妹だしね。

「わーわー！聞きたくない！聞きたくないー！」

「いいから聞けつて。お前だつてすぐには納得できないと思うんだ。だからこういうのは早い方がいい」

義理とは言え妹が出来るんだ。すぐに納得するのは難しいかもしれないからね。

「いやじゃああ!!こんな、こんな事なら会いとうなかつたあ」

そう言つて彼女はガチで泣き始める。……そろそろ本当のこと言うか。

「あいつはさ」

「うええええん」

「俺の今の妹なんだ」

「うええええ……なんと?」

「だから妹なんだつて」

そう言ううと魔王は俯いて震えだしたと思つたら、涙目で真っ赤な顔を向けてきて拳を振るつてきた。

「あつぶね！テメエ何しやがる!？」

「うっさいわ阿呆！貴様わかつていてあんな話し方したじゃろ！」

「うん」

「なぜじゃ!？」

「お前の泣き顔が見たかった」

「貴様あ！」

そんな感じの会話を俺たちは暫くしていたのだった。

職業判定

あれからようやく落ち着きを取り戻した魔王は、肩で息をしながらこちらを睨みつけていた。

「やつと落ち着いたか、まったく。ガキじゃねえんだからもう少し冷静にだな……」

「この世で貴様だけには絶対に言われたくないわ！お主のやったことの方がよっぽどガキじゃ！このクソガキ！」

「あ？やんのか、泣き虫！今度はマジで泣かすぞ！」
「もう泣いたわ阿呆！」

そう言う魔王はまた泣きそうな顔になる。

「……私がどれだけ悲しくなった事か。冗談でもああいう類のものはなるべくやめてくれ」

そう言うて俯く魔王を見てようやく俺も罪悪感を覚える。……確かに結構不謹慎なこと言ったな、俺。

「……あー、その、すまんかった。久しぶりに会えて嬉しくてついやつちまった。こういう事はあんまりしないようにする」

「……ふふ。そこで絶対と言わんあたりお主らしいのう」

魔王は顔を上げて笑みを浮かべてそう言った。

「もしかしたら意図せず言っちゃまう時があるかもしれん。気をつけはするが確約はできん」

「うむ。今はそれでいいさ。こうしてまた会えただけでも私は幸せだからな」

「……俺もだよ」

そう言うて俺達は互いに無言になる。久しぶりに会って何を言えればいいのかとか、気恥ずかしさとかでなんとなく口を開けないでいると、クラスの奴らがいる方から大きな声が聞こえてきた。

「凄いです、冬馬さま！【剣聖】は職業クラスの中でも本当に稀有なものなんですよ！こんな凄いお方がいれば私たちも勝てるかも！」

王女さまがそう言うくとクラスの奴らも、おお！と驚いた声を上げ口々に冬馬？という奴を褒め始める。

「流石だぜ、冬馬！」

「凄いよ、冬馬くん！」

「彼がいれば私たちがいらないんじゃない？」

「などなど思い思いの言葉を口にする。褒められている男はその顔に笑みを浮かべながら、首を横に振る。」

「そんな事ないさ。あくまでこういう職業になったってだけで今の俺は全然大したことない。だけど、これから皆と一緒に成長していきたいと思ってるから、いらない人なんていないよ」

その言葉にクラス的女子達はキャー！と言いながら頬を染めている。

そんな様子を俺と魔王は白けたように見ていた。

「なんじゃ、あれ？」

「さあ？よくわからん」

「それに【剣聖】ってそんなに珍しい職業だったかの？」

「いや、俺の時には割とゴロゴロいたような」

俺たちがいた頃は【剣聖】を持つ人はどの国にも四、五人はいたはずなんだが。この時代ではそんなに珍しい職業なんだろうか？

「そう言えば、いまさらで悪いんだが今って防音関係の魔法かけてる？俺ら結構やばい事話してる気がするんだが」

「本当にいまさらじゃのう、まったく。……かけておるよ。お主に話しかけた時から」

「マジか。すまん、助かった」

その言葉に俺はほっとする。いや、会えたのが嬉しすぎて忘れてたけど、魔王と戦おうって奴らの前で魔王、魔王と連呼するのは流石にまずいよな。この場にいる奴ら全員と戦っても負ける事は無いけど無駄な争いはしたくないし。

「でさ、正直どう思う？」

「ふむっ？どう、とは？」

「あの、王さまと王女さまが言った事」

「あー、それか」

俺が魔王にこの問いをした理由。それは彼らの話にいくつもおか

しなところがあつたからだ。

「数年前に突然魔王達が現れたって言ってたけどこれ、おかしいよな？」

「そうだのう。この世界は魔王が存在しないと回らんようになっておる筈じゃし。恐らくもつと前の時代には私がいたはずだしのう」

「だよな。でも、そうするとあの王女さまが嘘ついてる事になるんだが」

「ついておらんよ」

俺の言葉にそう返す魔王。見ればその瞳は金色に輝いている。

「使えるのか、その目」

「うむ。向こうでお主の事を思い出してからな。お主も知っておろう？この目の状態の前では虚偽の話は役に立たん」

「……ああ。よく知ってるよ」

『**真実の魔眼**』

その目で見た相手が嘘を言っているか分かる魔眼。魔力を込めれば相手に真実を無理矢理話させる事も出来る強制力を持つ。

昔幾度となくそれで嘘を見破られてるから、その凄さは理解している。

しかしそうなるとあと考えられるのは……。

「あの王さまが王女さまに嘘の情報を語ってるのか」

「まあ、そうであろうな」

そう言つて俺たちは王女さまの後ろにずっといる王さまに視線を向ける。ずっと無表情で何を考えてるかわからないが、これからは注意した方がいいかもな。

「む？あれはお主の妹ではないか？」

「んー？ああ、本当だ。いつのまにか桃花の番になつたのか」

魔王が王女さまやクラスの奴らがいる方を見ながらそういうので俺もそちらを見てみると、ちょうど桃花が職業を見るところだった。

桃花が水晶に手をかざすと、水晶が淡い青色の光を放つ。そして暫くして青い光が収まると王女さまが驚愕の表情で桃花を見つめていた。

「……え？『劍姫』に『賢者』!?嘘。まさか、ダブルクラス!？」

王女さまの驚きようが凄かったからか周りの奴らもぎわめき始める。

その中で冬?春?まあ、どっちだか忘れたがそんな感じの名前の奴が王女さまに声をかける。

「あの、王女さま?ダブルクラスとはいったい何ですか?」

「……あ、すみません。あまりの事に取り乱してしまって。桃花さまも申し訳ありません」

「い、いえ!それより、ダブルクラスっていったい?」

「はい。ダブルクラスはその身に二つの職業を持つ事を言うのです。しかし、基本一人の人間には一つの職業が基本の筈で、その、私はつきりおとぎ話の類だと思っていたのですが」

王女さまはそう言うのと先ほどの男の時よりも期待の眼差しを桃花に向ける。

「それに、『劍姫』と『賢者』と言うどちらにも稀有な職業!桃花さまどうかその力を我々のために!どうか!」

そう言つて桃花の手を握る王女さまの勢いに押され、桃花は数歩後ろに下がる。

「は、はい。それは、もう。私なんかが役に立てるかはわからないですけど、出来ることは頑張ろうと思います」

「ありがとうございます!とても心強いです!」

そう言つて顔を綻ばせる王女さま。

そんな彼女を見て同じく顔を綻ばせる桃花に一人の男が近づく。

「……あれ?えつと。誰だっけ?」

「冬馬じゃぞ。確か」

「あー、それだ。てか心読むなよ」

「なんとなく顔に出ておつたぞ。お主、顔に出やすいところは変わらぬのう」

そう言つて魔王は意地悪く笑う。

まあ、とにかく冬馬とか言う奴が桃花に近づくと手を差し出す。

「おめでとう。桃花ちゃん、でいいのかな?これから一緒に頑張ろう」

「はい。えっと、冬馬先輩ですよね。よろしくお願いします」

桃花はそう言つてそいつの手をとり、握手をする。

その光景を王女さまは微笑ましそうに見た後辺りを見渡す。

「さて、これで全員でしょうか？それならば今日は皆さまお疲れでしょうから、皆さまがこれから過ごしていただく部屋に移動してもらおうと思うのですが」

「あ、ちよつと待つてください。まだ兄さんがやってません」

「確か転校してきた永夜さんもしてないはずだよね」

桃花と冬馬と言う奴がそう言うのとクラスの奴らは辺りを見回し始める。

「これはそろそろ出ないとまずいのではないか？」

「……だな。しゃあないか」

そう言つて俺は声を大きくする。ついでに手を上げながら。

「はいはい。ここでーす」

「もう、兄さん。ふざけないでよ」

「いや、なんかお前みたいな凄しみい奴が出た後だと出にくいからさ、こっやつて気分上げてかないと」

「そんなことないと思うけどなあ」

「いやいや王女さまがあんなに驚おどいてんのに凄しみくないわけないだろ」

桃花とそんな会話をしながら王女さまの前に魔王と一緒に出る。

「初めまして、王女さま。私の名前は桜木 空と申します。以後お見知り置きを」

「私は永夜 白と申します。これから、よろしくお願いいたします」

「ふっつ。ツツツ!!」

俺が王女さまに挨拶をすると魔王も同じように挨拶をするのだが、らしくない挨拶で少し笑つてしまう。すると魔王が気づかれない速さで俺の足を踏み抜いた。声は出さなかつたのでいいが、それでも非難の視線を向けると向こうは冷たい視線を俺に向けていた。

(後で覚えておれよ、貴様)

(テメエこそ、後でおぼえてろ)

視線だけで俺たちはそんなやりとりをする。

そんな事をしてしていると王女さまが口を開く。

「はい。よろしくお願いいたします。空さま。白さま。お二人がどのような職業なのか楽しみにしております」

「ははは。そんな大したもんじやないと思えますけどね。あ、あと俺の事は呼び捨てでいいですよ」

「私もそこまでのものではないかと。それと私も呼び捨てで構いません」

「そんな呼び捨てなど私には恐れ多い事です。あの、ではお二人の事は空さん、白さんと呼ばせていただきますね。ではこの水晶に手をかざしてください」

「まあ、それでいいです。んじやあ俺から」

「……どうぞ」

そう言つて俺から手を水晶にかざす。……まあ、出るのは何かわかつてはいるから特にドキドキもワクワクも無い。

そして水晶に出てきた俺の職業は、

【村人】

『忘れられた英雄』

職業判定から早一ヶ月。クラスの奴らが現在戦闘訓練などをして
いる中、俺と魔王改め白（判定の後互いに今の名前で呼び合う事にな
った）は王城の図書館に籠っていた。

その理由として、この世界が本当に俺と白がいた世界なのか、その
確認を取るため。そして、その場合俺たちが死んでからいったいどれ
だけの年月が経っているのか。

他にもまあ、いろいろと理由は有るが、とりあえずそんな事を調べ
るために俺たちはここにいる。……いるのだが、そろそろこの図書館
で得られる情報も無くなってきたな。

俺は今読んでいた本を閉じると一度大きく伸びをする。

「白ー。そっちはどうだー?」

「うーむ。そうじゃなあ。この世界が私たちのいた世界だと言う確証
はほぼ得たし、死んでからだいたい二百年くらい経っているのもわ
かったぞ。私たちの記述はないがその頃に起こった出来事に私たち
が知っているものもあつたし。……しかし、なあ」

「……やっぱり無いか?」

「ああ。二百年前の記録はあるのに、それから今に至るまでの記録が
まったく見当たらんのだ。あと、私たちの事もな」

「うーん。やっぱりこれっておかしいよなあ」

これまで調べた情報は明らかに人間側に都合の良いように改ざん
されていた。

二百年前。俺たちがいた時代の戦争も人間側が勝ったものしか記
録されていないし。戦っている相手もはっきりと明記していない。
ここまで酷いと流石に呆れて物も言えない。

「これは、やはり王女さまが関係しておるのかのう。カノンに偏った
知識を植え付けるためか?」

「どうだろうな。その可能性もあるとは思うけど、でもなあ」

だとすると人間側で戦っていた俺の記録がまったくないのはどう
いうことだ? 一応この世界の敵と最後まで戦ってたんだから、少しく

らい記述があっても良いようなもんだが。

俺たちが頭を抱えていると、図書館の扉が開く音がする。

俺たちが扉の方に目を向けると、そこにはちょうど今話をしていた王女さまが立っていた。

「あ、空さん、白さん。こんにちは。お二人はまた調べ物ですか？」

「こんにちは、カノンさま。まあ、今の私たちに出来ることってこのぐらいしかないですから」

「こんにちは。白の言う通りですよ。なんせ俺たちは【村人】ですからね。戦闘の役に立たないし、それに外にいても周りの目が冷たいし」

そう。あの後白も調べたのだが【村人】と出たのだ。まあ、自分たちの意思でそうなるようにしたから俺たちは特に驚きもがっかりもしなかった。

しかし、周りの反応は違った。まず王女さまの反応があまりよろしくなかった。本人も無意識でそんな反応をしまっていたらしいが、その反応を見たクラスの奴らは俺たちの職業があまり良いものではないと理解したのだろう。その場では特に何も言われる事は無かったのだが、日に日に俺たちに対する視線や当たりは冷たくなっていつている。

その反応は周りの兵士たちも同じようなものであり、今も変わらず接してくれているのは桃花と王女さまだけだ。

「うっ。……すみません。あの場で私があんな反応をしまったせいだ」

「いや、別に気にしてないんで大丈夫ですよ。それに遅かれ早かれこういう風にはなつたでしょうし」

「そうですよ。私たちは別に気にしていないので、王女さまも気にしないでください」

「ありがとうございます。そう言ってもらえると救われます」

王女さまはそう言う少し小走りで俺たちの近くに寄ってくる。

「それで、今日は何を調べているんですか？」

「昨日と変わらず、この世界の歴史ですよ。でも、うーん」

「どうしました？」

「所々記録のない時期があつて。それでちよつと困つてるんです」

「記録のない時期ですか。ふむ」

「この記録がある場所に心当たりつてあります?」

「……すみません。私にも心当たりは」

あ、でもーと、そう言つて王女さまは手を叩く。

「それと関係は無いかもしれないんですが、『忘れられた英雄』の話は見ましたか?」

「……『忘れられた英雄』?」

はて? そんな話があつただろうか? 念のため白に目を向けるが向こうも首を横に振る。

「……いいえ。見てないです。それってどんなものですか?」

白がそう問うと、王女さまは絵本のある本棚へと足を運ぶ。

「私が幼い頃、まだお母さまが生きていた頃に読んでいただいたものなんです。なんでも二百年前に存在していた筈なのに、記録に残らなかった英雄が主人公の絵本なんだそうですよ」

そう言つて王女さまが持つてきたのは少し色褪せた絵本だった。その本を開きながらその内容を語り始める。

昔々のそのまた昔。まだ、世界が悪い龍に支配されていた時のお話。

ある所にひとりの少年がおりました。

悪い龍によつて家族を亡くした少年は龍を倒そうと旅を始めます。

その過程で少年は沢山の友を得ました。獣人にエルフ、魔族に天使。

時に戦い、時に助け、少年は彼らと縁を繋いでいき、いつしか少年は勇者と呼ばれるようになりました。

そんな中で、少年は愛を知りました。

しかし少年の愛は結ばれません。何故なら相手は悪い龍だったからです。

少年が愛を知った頃には龍に対する怨みは少年の中には既に無く、龍と共に生きたいと願いますが人は、世界はそれを許しません。

そして、その果てに少年は愛する者と共に死ぬ事を選びました。

龍は死に、人々は喜び勇者たちを称えます。しかし、その中に少年はおりません。次第に彼を知る者たちの記憶の中から少年のことは消えていきました。

しかし、彼の事を忘れなかった彼の友たちは彼の行った事を少しでも残すため、この本を作りました。

彼の事を、『忘れられた英雄』の事を、絶対に忘れないために……。

「……と、これがこの本の内容ですね。どうでしたか」

「……ああ、そう、ですね」

……この話。所々違う所もありはしたけど、でも、これは。

白の方を見ると向こうも俺の方を見ており、目が合うと小さく頷く。

「えっと、どうしました」

「いや、これまで調べてた記録にこんな話無かったので。ちよつと、驚いてしまって」

「そうですよね！私も初めて聞いた時は驚きましたもん！今までお父様や他の方々に聞いていた二百年前の内容と違いすぎて」

でも、と王女さまはそこで言葉を切ると微笑む。

「私は、皆が知る勇者さまの英雄譚よりも、こつちのお話の方が、人間らしくて好きなんです」

そう言つて本を見る彼女の瞳には羨望や憧憬の念が込められていた気がする。

決心

それから暫く王女さまといろいろな話を話した後、王女さまは政務などがあると言う事で図書館を出て行った。

「……結局、俺たちに関する情報はあの絵本だけか」

「しかし、最初はゼロだった事実を踏まえればこの情報は大きいぞ？その点では王女さまに感謝せねばのう」

「まあ、確かにな。もしかしたら俺たちの事を覚えてるかもしれない奴らにも目星がついたし」

「……ではそろそろ出るか？」

「うーん。出たいけど、でもなあ」

そこで悩む俺に白はため息を吐く。

「はあ。妹の事か」

「あー、まあな。やっぱりわかるか？」

「どれだけお主と一緒にいたと思っておる。たかだか十数年離れておっただけでわからなくなるわけなからう？」

やれやれと呆れたようにそう言った後、目を瞑り、何かを思い出しているのか優しそうな笑みを浮かべる。

「……まあ、妹が心配になるのも分からなくは無いがの」

「そーいやお前にも妹がいたっけか」

「私の場合は妹分だったがな。それでも、少なからず気持ちはわかるわ」

しかし……。白はそう言うとき目を開き真剣な顔でこちらを見る。

「あの娘を連れて行くわけにもいくまい。これから私たちが行く場所にあの娘を連れて行けば三日と持たずに死ぬぞ」

「……わかってる」

そこで、俺たちの間に沈黙が訪れる。

白が言う事は理解している。事実これから俺たちが行くこうとしている場所によっては桃花は何も出来ずに死ぬだろう。でも、あいつをここに一人置いてくわけにも……。

そこまで考えた所でまたもや図書館の扉が開かれる。

「兄さーん？いるー？」

そう言いながら入ってくるのは今ちようど話をしていた桃花だった。

……あれ？さつきもこんなこと思ったような？これが噂をすればなんとやらつてやつか？ちよつと確率高すぎない？

俺がそんな事を考えていると、桃花は俺を見つけたのか嬉しそうな顔をする。……が、俺の近くにいた白の姿を見ると途端に少し不機嫌そうな顔になった。

「……こんにちは、白先輩。今日も兄さんと一緒に調べ物ですか？」

「こんにちは、桃花ちゃん。うん。君のお兄さんと二人で調べ物だよ。だって私たちは「村人」だもん。それしか出来ないからね」

白はやけに二人での所を強調してそう言う。

すると桃花は目を鋭くして白を睨みつけるが、白が涼しそうな顔でいるのを見てため息を吐くと俺の方へと向き直った。

「あんまり言いたくないけど、たまには外に出ないと体悪くするよ」

「あー、まあ、たまには出るようにするよ。それで？今日はどうした？」

俺がそう聞くと桃花は嬉しそうな顔でこちらに近づいて来る。

「そうそう！最近魔法を習い始めたって話をこの前したじゃん？」

「そう言えば言ってたな、そんな事」

その日は桃花がやけにご機嫌だったのを覚えている。

「そう、それ。それでね、今日初めてその魔法が成功したんだよ！凄くない!?!」

そう言つて同意を求めてくる妹はまるで犬のようである。尻尾があつたら激しく揺れてるんだろうなあ。

「へえー。凄いなあー」

「……なんか心がこもってない」

「そうか？じゃあ……」

俺はそこまで言うと手を桃花の頭の上に置いた。

「よくやったな！凄いで」

「なつなつなつ！何してんの、急に!?!」

俺が頭を撫でると桃花は顔を真っ赤にしてそう言う。

「ん？嫌だったか？じゃあやめるか」

「……べ、別に、嫌じゃないけど。この年だと流石に恥ずかしい」

そう言っただけから視線をそらす桃花。まあ、そりやそうだよな。

そんな事をしていてと白が大きく一度咳払いをした。

「……それで？桃花ちゃんはその事を言うためだけにこんな所までわざわざ来たの？」

「……だったらなんだって言うんですか？」

「さつさと戻った方がいいんじゃない？これからまだいろいろとやる事あるでしょ？」

白がそう言うのと少し気まずい顔をする桃花。……まだ、やることあるのにこつちに来たのかよ。

「だったらお前とつと戻れよ。他の人も困る事になるだろう？」

「うう。わかったよお」

そう言っただけで少ししよんぼりとした顔をする桃花だったが、何かを思い出したのかすぐに表情を元に戻すと俺の目を見て口を開く。

「……ねえ、兄さん。今日こそ一戦やらない？」

それはここ数日毎日桃花が口にする言葉。桃花からしてみればただ純粹にやりたいだけなんだろうけど、今の俺の返答は決まっているわけで、

「無理だつて。昨日も言ったろ？」

「でも……」

いつもなら俺が無理と言えば渋々諦めていたのだが今日は何故か食い下がってくる桃花。

「ほ、ほら！たまには体を動かさないと体に悪いし！それに腕だつて鈍っちゃうしよ」

「だからつてお前とやる必要はないだろ。そもそもお前は【剣姫】だぞ？【村人】の俺が勝てるわけないだろうが」

俺がそう言うのと苦しそうな顔をする桃花。

「そんなの分からないじゃん！向こうにいた頃は私一度も兄さんに勝てなかったしよ！」

「お前、その職業ケラスを与えられてからそれ専用のスキルとかも与えられたりしたんだろ？それでお前に勝てるとか俺の事馬鹿にしてんのか？」

「私は、別にそんなつもりじゃー！」

「もうそこまでにしといたら？」

俺と桃花がそのまま言い合いになりそうになった時、どちらに言ったのかは分からないが、白のその一言によって俺たちは少しだけ落ち着くことができた。

「とりあえず空は言い過ぎだし、あとその少しずつ挑発的になっていくの直しなよ」

「……悪い」

「……そして桃花ちゃん」

白はそこで少し間を開けると続きを口にする。

「別に貴女を責めたいわけじゃないけど、少しはこっちの事を考えたらどう？さつきから空は無理だって言ってるのに自分の気持ち優先で空の事考えてないよね？それってどうなの？」

「それは！兄さんが私と剣を交えてくれないから！」

「それだってちゃんと理由言ってるじゃん。【剣姫】の貴女と【村人】の空。その実力に差がありすぎるんだって」

「向こうの世界では兄さんは私より強かったもん！」

桃花がそう言うとき白は大きなため息を吐く。

「いったい、いつまで向こうの話をしているつもり？向こうとこっちとじゃいろいろと変わってるってわかるでしょ？」

白はそこで言葉を止めると、チラリと俺の方を横目で見て、再度口を開く。

「あのさあ、こんな事言いたくないけど、いい加減お兄さん離れた方がいいんじゃない？今の貴女の兄はこの世界で最弱の職業なんだからさ。甘えるのも大概にしなよ」

「……」

白がそう言い終わる頃には桃花は俯き肩を震わせていた。

何か言っただけなのに、なんで白がそう言っただけなのに悪役になっ

たのか、なんとなくだがわかるので声を掛けることは出来ない。

それから少しして桃花は顔を上げる。目から涙を流すその姿に罪悪感が生まれる。

「……私はそんなつもりじゃなかったのに」

そう言っただけの方を見た桃花は俺たちに背を向ける。

「……馬鹿」

最後にそう言っただけ桃花は図書館を走って出て行った。

そして桃花の足音が聞こえなくなった所で口を開く。

「……悪かったな。悪役みたいなことさせて」

「別にいい。私は魔王じゃからな。それに実際思っていた事でもある」

「……そうか」

「……そうじゃ」

そう言っただけ少しの間互いに口を開かずただ図書館の扉を見ていた。

「今日はもうやめるか」

「うむ。それが良かろう」

俺たちはそう言っただけ一緒に図書館から出て行った。

そしてその夜。

俺たちがあの日召喚された場所。王の間で。

「すまぬが、お主たち二人にはこの城から出て行ってもらう」

俺と白は王さまにそう言われたのだった。

逃亡

「すまぬが、お主たち二人にはこの城から出て行ってもらおう」

王さまのその言葉を俺たちは黙って聞いていた。

そんな俺と白の周りには俺ら二人と共に呼ばれたクラスの奴らに桃花が囲んでおり、王女さまは王さまの後ろに控えていた。

クラスの奴らは王さまのその言葉を聞きある者は哀れみを、またある者は蔑みをその表情に浮かべて俺らを見ていた。

王女さまは目を見開き驚いていることからこの事は知らされていなかったのだろう。それは桃花も同様だ。

「……王さま、失礼ながらお聞きしますが、何故でしょうか？我々は何もしていない筈なのですが？」

「……ふん。何もしていない事が問題なのだ。こちらの都合ではあったがお主達を呼ぶのにどれだけの手間をかけたと思っっているのだ、全く」

俺の問いに王さまは鼻で笑うと不機嫌そうな態度を隠す事無くそう言った。

その態度に白は表情を険しくするが、一度深呼吸をすると口を開く。

「……確かにこの一ヶ月私たちは他の人たちがやっているような戦闘訓練などはしていません。ですが、それは仕方がないではありませんか？だって私たちは【村人】ですよ？」

「たどえそうであつたとしても、一ヶ月何もせずただ図書館にずっといるお主たちをこの城に住まわせる程の余裕は今この国には無い」
「……図書館を使う事を許可したのは王様だった筈では？」

白がそう言うと王さまは眉間に皺を寄せこちらを睨みつける。

「……だからと言ってずっと図書館にこもる事など許可していない。

それに、最初の頃は我らのために何か敵について調べているのかと目を瞑っていたが、どうもお主たちはこの国やこの世界の歴史について調べておるらしいな。そんなものを調べていっただいどうすると言うのだ？」

そこまで言って王さまはさらに眉間の皺を濃くし、俺たちを睨みつける視線を強くする。

「……さては、お主たちは魔王の配下なのではないか？」

「そんな!？」

王さまのその言葉に俺たちよりも早く反応し、声を出す奴がいた。その声ができる方にチラリと視線だけを向けると桃花が驚いた表情で王さまを見ていた。

「ま、待ってください、王さま！兄さんは確かに向こうの世界にいました。それならこちらの世界の存在である筈の魔王の配下であるなどおかしくはないですか!？」

「桃花殿。もしかしたらその記憶は後で植え付けられた記憶かもしれないぞ？あの姑息な奴らならそれくらいのは事はやりかねん」

「そ、そんな……」

桃花はそう言うと言じられないと言った顔を俺に向ける。……いやいやいや、そこで心が揺れないでくれ妹よ。お兄ちゃん悲しくて泣くぞ。

「そうとなれば、出て行ってもらうのも些か困るな。……ふむ。お主たちは暫くこの城の牢に入っていてもらおうとするか」

「……流石に横暴が過ぎませんか、王さま？全て貴方の憶測ではないですか」

こめかみをひくつかせ、声を震わせながら白がそう言う。

「可能性は少しでもあれば用心するべきであろう？」

「それなら私たちの他にも怪しく感じられる者はたくさんおるじやろっ……でしょう？そんな憶測だけで捕えられたらこっちは堪ったもんじゃないんですが？」

とうとう白の奴は王さまを睨みつけ、素が出そうになる。流石にまじかと思いい俺も口を開こうとした時だった。

「……おい。何のつもりだ？」

「……王へのこの女の態度、不敬である。故に少々痛い目にあってもらおうかと」

「少々？はっ。殺意垂れ流しておいて何言つてやがる」

俺がとつさに組み伏せたそいつの手には刃物が握られており、少しでも力を緩めていたらその刃は白へと振り下ろされていただろう。あまりに突然の出来事にクラスの奴らや桃花、王女さまは驚いた顔で俺たちの方を見ている。……やっちゃまった。

「その者の私への忠誠心は特に強くてなあ。私に対するほんの少しの敵意にも反応するのよ。……で？今の状況をどう言い訳する？白とやら」

「……何のことでしょうか？」

「はっ！この期に及んでそれか？分からないのなら言つてやろう。」

ただの【村人】である筈のお主の連れが何故【暗殺者】あんざつしゃの職業クラスを持つ我が家臣の一撃を止め、さらには組み伏せられる？ん？」

そこまで言われてクラスの奴らも気づいたのだろう。本来【村人】は戦闘が出来る職業ではない。スキルにしたって普通なら〈農業〉や〈牧畜〉などのほのぼのとした非戦闘系スキルしか使うことが出来ない。

そんな【村人】である筈の俺が手を抜かれていたとは言え【暗殺者】の攻撃を止めたのだ。これほどおかしな事も無いだろう。クラスの奴らの驚きの視線は次第に疑惑の眼差しへと変わっていく。

「……ちっ。謀りおつたな」

「はて？何のことかな？たまたま家臣がお主に攻撃をし、たまたまお主の連れがそれを止めた。そしてたまたまこの場に集めていた勇者たちが見ていた。ただそれだけの事であろう？」

「……はっ。嘘が下手すぎるのでは無いか？このクソ狸」

白の嫌味に王さまは顔を真っ赤にさせる。

「ふざけるなよっ！女あ！我が家臣よ、そなたの忠義を我に示せ！」

「……え？」

「どうした!?早くせよ！」

「……我が、王のために」

そいつがそう言つと、そいつを中心に俺と白を包んで魔法陣が描かれる。

「なんだ、これ？」

「ふはは！それは家臣が我へと忠義を示す魔法よ！その者の命を代価に我らの敵を滅ぼすのだ！」

なるほど。自爆魔法って所か。それにしても素直にそれを言うとか思ってたよりも馬鹿なのかあの王さま。もう既に勝ったような顔で笑ってるし。

「……白？」

「もうやった」

「ははははー……は？」

王さまは余裕そうに笑っていたが、その光景を見て信じられないものを見たかのような驚きの表情になる。

「な、何をした!?!」

「別にどうと言うことはしてらんよ。ただ今の術式を解析して書き換えただけじゃ」

「はあ？」

「あんな雑な術式を目に見えるほど大きく展開しておるのだ。解析してくださいと言っておるようなものじゃろ」

「今のほんの少しの時間でそんなことをしたと言うのか!?!ありえん！」

「ふん。……この程度出来なくては魔王などと呼ばれはせんよ」

白が小声で言ったその言葉は王さまに聞かれることはなかったが、近くにいる俺や俺が押さえつけている奴にはしっかりと聞こえていた。

「な、に？お前は……、いや、お前たちはいつたい」

「さあもう。それより逃げろぞ、空」

白がそう言うのと新たに俺たちを囲むように魔法陣が現れ、光り始める。

「そーいやあ、さっきのやつを書き換えたとか言ってたな」

「おうさ。一度発動した魔法陣は消すのが大変だからのう」

「で？どう書き換えたんだ？」

「まあ、あんまり時間も無かったからのう。これは……」

「何を勝手に話を進めておるのだ！逃さんぞ！」

王さまがそう言うのと後ろの扉から兵士たちが入ってくる。

クラスの奴らを見れば各々が自分の武器を構える。

「これで貴様らは終わり……」

『ちよつと黙れ』

白が一言そう言うのと王さまは口を閉じ静かになる。突然の事に驚きやがら、必死に口を開こうとしているようだが暫く開くことは出来ないだろう。

「で？・続きは？」

「うむ。あんまり時間もなかったのな」

そこで魔法陣の光が一層強くなり、俺たちを包み込み、視界が光に覆われた。

そして光が収まり周りを見てみると、俺と白がこの一ヶ月お世話になっていた図書館だった。

そこで白が先ほどの続きを口にする。

「あまり魔力を使わず、私が行ったことのある場所で一番近く、馴染みのある場所に転移するようにした」

そう言ってドヤ顔をする白の頭にチョップをした俺は悪くないだろう。

なんでよりもよってこんな近場にするんだよ、この馬鹿は!?

作戦会議？

「くそ！ いったいどこに行った！」

「苛つくな！ まだこの城の中にいる筈だ、探せ！」

俺たちはそんな声を図書館の隅に隠れながら聞いていた。

「……おい、なんで俺たちがまだ城の中にいる事ばれてんだよ」

「……私を知るわけないじやろ。どうせ、またお主が何かやったんじやろ。 どうせ」

「は？ 何もやってねえけど？ ……そもそも俺に何かやる時間がありましたか？ ないだろうがよ。 ついさっきの事をもう忘れたんですかと・り・あ・た・ま？」

「……別に軽い確認とちよつと場を和ませようと思った上での冗談じやろうが。 ジョークじやろうが。 そんな事も分からんのか？ あ、分かるわけもないか、お主精神年齢五歳児だものなあ？」

「……」

「ぶっ殺す!!」

「待て待て待て待て!!」

俺たちが互いに拳を握りしめ腕を振りかぶろうとした時、俺が連れてきた奴が間に割って入って来る。

「何でお前たちはいきなりそんな喧嘩をし始めるんだ!?! そんな場合じゃないだろう!?!」

「こいつが喧嘩を売ってきた」

俺たちが同時にそう言うのと互いに互いを睨みつける。 ……ハハハ。やるか？ ん？

「はあ。 おそらく私たちがこの城にすることがバレたのは私のせいだろう」

「……どういふことだよ」

「……私たちはもしもの時の為にと自分たちの居場所がわかる魔法をかけられているのだ。 それだと思う。 まあ、その魔法はかなり大まかな位置しかわからないらしいからすぐには見つからないだろうが」

……へえ。そんな魔法かかっているんだあ。ふーん。

「……おい、白」

俺がそう言うのと白は俺から目をそらし明後日の方を見る。

「……ま、まあ、知らなかったものは仕方ないのう。うむ。私悪くない」

「……おい」

「あ、さっさとその魔法といっておかんな。あとが面倒じゃし」

そう言つて白が連れてきた奴に触れるとそいつの体が淡い光に包まれ、その光は霧散した。

「……まさか、今の一瞬で？」

「まあ。よし、これで大丈夫じゃ」

「……もうかなり遅いけどな」

「……」

俺の一言に白は俯き、少しの間黙っていたが、急に顔を上げたと思つたら涙目で俺を睨みつけた。

「仕方ないじゃろ!? 知らなかったんだから! だいたいお主があの時此奴を組み伏せなければ何とかなったかもしれないじゃろうが!? ええ!」

「はあ!? お前あの時俺が止めなかったらこいつ殺してただろうが! わかつてんだからなこっちは!」

「な、何を言つておるのじゃ!? わ、私は、そそ、そんなことせんわ!」

「だったらそんな慌ててんじゃねえよ! 凶星だろうが! 密かに魔法の準備をしていた事気付いてるからな!」

俺たちがまた言い合いを始めたのを見て連れてきたそいつは頭を抱える。

あれ? そういえば……。

「そういや、お名前前なに?」

「は? なんだ、突然」

「ずつとお前だとかそいつだとか言うの面倒なんだよ」

「確かにのう。ほれ、もうしてみよ」

白も同じ事を思っていたのかすぐに納得してそいつに名を聞く。

「名、か。すまないが私に名はないのだ。なので適当に呼んでもらっ

て構わないよ」

「ふむ名がないか。それは不便よなあ」

「うーん。じゃあシナナな。ナナシを反対から読んだらそうなるから」

「今考えたって事がよくわかる程に安直じゃなあ。……まあ、いいか。他に思いつかんし」

白から呆れたような目を向けられるが特に反論はなかった。

「シナナ、か。了解。私はシナナだ」

「じゃあシナナで。はい、決定」

そういうそいつ改めシナナの声は心なしか明るく思える。

「それより、お前大丈夫なのか？」

「？何がだ？」

「いや、王のためにとか言ってたのに俺たちにさつきからかなり情報漏らしてる事だよ。それに、なんか口数多くないか？」

俺たちがこの世界に来た時とつい先程の事を思い返してみても、もう少し静かな奴だったような気が。

しかし、その問いに答えたのは白だった。

「ああ、その事か。空よ。シナナがああクソ狸の前で言っておった事全部嘘が混じっておったぞ」

「嘘？……ああ、そういう」

「……バレていたか。嘘は得意だと思っていたんだが」

「あー、いや、こいつのこれはバレたとかそういう次元の話じゃないから。気にすんな」

本当『真実の魔眼』の前だと些細な嘘も意味を成さないからなあ。相手にするのにこれほど嫌なものも無いが、味方だとこれほど心強いものも無いだろう。心を持った存在限定だが。

「で？なんで嘘を……なんて野暮か。お前の反応見るとなんとなくだがわかる」

自爆しろと言われた時の反応といい、今俺たちにたくさん情報を与えている事といい。それに白が言うにはこいつがああ狸の前で言ってた事全部嘘らしいし。さしずめ、何かしらの弱みを握られてたつて

所か？

「……そう言ってもらえると助かる」

「まあ、今はそれは置いておくかの。それよりも、じゃ。どうする？
空。正直今のままだと逃げられんぞ」

……そうなんだよなあ。いや、本当どうするか。

「……白。お前転移は」

「三人運ぶとなると魔力が足りん。それに、今の私にはここより遠くに転移できるポイントが無い」

「なに、そこは引き継がれなかつたわけ？その眼は使えるのに」

「この体が実際に行つたわけでは無いからのう。この眼は私の魂と結びついておるから引き継げただけじゃろ」

「あー、そうか。なるほどな」

でも、そうなるかどうかかなあ。

「……ちよつといいか？」

「ん？なに？」

「どうして悩んでいる？お前たちほどの実力ならどれだけ数がいようと問題ないだろう？」

「……まあ、倒す分には問題ないっていうか朝飯前っていうか」

そう、ただ、倒すだけなら正直な話俺一人でも余裕でやれる。やれはするんだが……。

「その場合相手の安全が保障できないんだよな。数が多いと余計に」

残念な事に俺も白も前世含めて大人数を相手に無傷で切り抜けるって事をした事が無かつたから、その辺普通の奴より加減がわからない。互いに敵は皆殺しって考えでいたからなあ。

間違えてクラスの奴らを殺してしまいました、じゃ流石に目覚めが悪い。あんな奴らでもな。

「そうか。じゃあ、数が少ない道ならなんとかなるのか？」

「まあ、数が少ないなら、多分」

「おそらくできるじやろうな。まあ、その場合私より空に任せる事が多くなると思うが」

まあ、そうなるよな。お前大技多いから。

「で？そういう事言うって事はあるわけ？」

「……ああ。本来は王族がもしもの時に逃げるために作られたものなんだがな。その通路なら大丈夫だと思う」

へえ。そんな通路があんのか。すごいな、王族の城ってのは。

「ほお。それはよいな。その道へはどう行けばいいのじゃ？」

「その道は何処にいても逃げられるようにと城の至る場所にそこへと続く道が作られているんだ」

「じゃあ、もしかしてここにも？」

「ああ。もちろんある」

そう言ってシナナが近くの本棚に入っている本を押し込むとその本棚が横へと動き出す。

「おお！おおおお！！」

「うるさいのう、もう少し静かにせんか」

「いやいや、これ隠し通路ってやつだろ!?これはテンション上がるわー！」

「はあ。お主のこういう所はいまいち理解できんのう」

なんか白が頭を抑えているがこれは仕方ない。男だったら一度はこういうの憧れるもんだらう？

「ここから行けば外に出られる筈だ」

「うっし。そういう事ならさっさとこの城から出ちまうか！」

「うむ。そろそろ城の外をしつかりと見たいしの。出させてもらおうとしよう」

「それじゃあ私は念のため殿を……」

「なーに言ってるんだ。お前も一緒に来い！」

俺はそう言って俺たちから離れようとするシナナの手首を掴む。

「え？いや、それは」

「お前がなに抱えてんのかは知らんが、ここから出たいと思ってるだろ？だったら俺たちと一緒に出ちまおうぜ。てか、連れてくから。お前に拒否権はない」

俺の言葉に戸惑うシナナは助けを求めるかのように白へ顔を向ける。

「ふふ。こうなった空は私にも止められん。さっさと諦めるんじゃない」

「……はあ。仕方ない。お前たちでは道もわからんだろうしな。道案内をしてやるとするか」

「おう。道案内、しっかり頼むぜ」

そうやって俺たち三人は通路へと視線を向ける。

「おし。それじゃあ、脱出作戦。開始と行こうか！」

そうして俺たちは通路へと一步を踏み出したのだった。

戦闘開始

隠し通路を進み始めて暫く。

始めは大理石で作られていたような綺麗だった壁や道だったが、今では広くなった代わりにゴツゴツとした岩になっていた。大方元々あった自然の洞窟に後付けで通路を作ったのだろう。その通路をシナナが先導し、俺と白はその後ろを歩いていった。

「しっかし暇だな。もう結構歩いたけど一人も兵士と会ってないんだが」

「本来この道は王族とそれに近い者達にしか知られていないからな。一般兵達はこんな道がある事すら知らないだろう」

「……そんな道をなんでお前は知ってたんだよ」

「この城について調べている時にたまたま見つけたんだ。その時についてにこの通路の地図もな」

そう言っつてその手に持つ地図を掲げて見せてくる。

「なるほど。それで？後どのくらいで出られそうなんだ？」

「ああ、あとはこの道をまっすぐ行けばすぐ……!!待て。誰かいる」

そう言っつて足を止めるシナナの後ろから前を見てみると少し先に出口らしき場所があり、その前に三つの人影があつた。

そして、その中にはよく知る人物もいた。

向こうも俺たちに気づいたのだろう。一人は敵意を、一人は迷いを、もう一人は悲しみをその瞳に宿して俺たちを見ていた。

俺はその中の一人、迷いをその瞳に宿す家族に向かつて声をかけた。

「よお、桃花。さつきぶりだな」

「ツ………にい、さん」

「ああ、お前のよく知る兄貴だよ。それとも、さつきのあのクソ狸……じゃなくて王さまが言っつた事を真に受けてんのか？」

「……」

俺の問いに桃花は答えを返さず、俯く。まだ頭の中で整理がついていないのだろう。

……無理もないか。今までずっと一緒にいた俺が兄弟じゃないかもしれないと言われて、もしかしたら自分が倒さないといけない存在かもしれない。しかも【村人】である筈の俺がシナナを組み伏せる所まで見てしまっているしな。

「だけど、俺たちは本当に家族だ。その事に嘘偽りはない。」

俺がそう言おうと口を開こうとした時、桃花を隠すように桃花の前に出てくる者がいた。その瞳は敵意を持って俺を睨みつけている。

「また彼女を言葉巧みに惑わすつもりか！そんな事俺がさせないぞ！」

俺に剣を向けてくるそいつ、（確か冬馬だったか？）は既に俺が魔王の手下だと決まっているかのようにそう言ってきた。

「おいおい。ちよつと待てよ。なんで俺が言葉巧みに桃花を惑わした事になってんだよ。てか、それだと俺が敵みたいじゃねえか」

「何を今更！あの場で見たことがお前たちが敵である証拠だろうが！」

その言葉に俺は本気で首を傾げる。……え？あの場で俺たちがはつきり敵だつてわかる場面あった？

「……なあ。俺の行動の何処が敵っぽかった？」

「いや、私にもわからん。え？お前なにかしたのか？」

「いや、身に覚えが……」

結局白と一緒に考えてみてわからなかったので仕方ないのでそいつに聞いてみる。

「なあ、俺あの場でお前らの敵だとお前に確定させるようなことしたか？」

「なにを言っている！突然現れたその彼をいきなり組み伏せたじゃないか!!」

冬馬がそう言う彼とはシナナの事だろう。でも、あれって先に手を出示してきたのシナナだし。

「……はあ？お前、なに言ってる……、いや、待て。まさか」

そこで、俺はある事に気付き恐る恐る冬馬に聞いた。

「な、なあ。一つ聞くんだけどさ、お前、あの時何が見えてた？」

「なに？だから突然現れた彼を……」

「……その前は俺が何してた。シナナ……こいつは何してた？」

「何を言っている？ずっと白さんの隣にいただろう！彼はそもそもい
なかつただろう!？」

「……うわあ、まじかー」

俺はその言葉に頭を抱えてそう口にする。

つまり、だ。こいつはあの場で殺意を持って白を殺そうとした所を
見していない。いや、見えていない。

……いや、こんな事つてある？仮にも勇者だとか言われてて、【剣
聖】の職業である筈の奴があ程度の速さを目で追えない？うわあ。

白の方を見ると白も気づいたのか、信じられないものを見るかのよ
うな顔で冬馬を見ていた。

「……ちなみに聞くけど、桃花もそうか？」

「……」

桃花は黙ってはいるが、驚いた顔で冬馬を見ているから多分見えて
いた筈。そう信じたい。……てか、これで魔王討伐とか無理じゃね？
あれが白より強くなるビジョンが見えないんだが。

そう思い、この世界の未来を不安に思っていると、最後の一人。そ
の瞳に悲しみを持った彼女、王女さまが前に出てくる。

「……空さん」

「どうも王女さま。さっきぶりですね」

「なぜ、なぜこのような事を？貴方は、貴方たちは本当に魔王の配下な
のですか？」

「……」

そう言っただけ俺たちを見てくる王女さまは、まるで俺たちに否定して
ほしいと懇願するような表情で俺たちを見てくる。

その問いに違う、と答えようとした俺よりも先に白が口を開く。

「仮に。仮に私たちが魔王の配下だったらどうするんです？」

「そ、それは」

「捕まえますか？拷問しますか？殺しますか？」

「……捕まえて、事情を聞きます。けっして、拷問などの類は行いませ

んし、殺すなどもつてのほかです」

「ですが、少なくともあの狸……じゃなくて王さまは私たちを殺すつもりですよ？ 実際貴女は見えていたのかは知りませんが、シナナを使って私を殺そうとしてますし」

「……」

そこで黙ってしまう王女さま。恐らくだけど王女さまもシナナが白を殺そうとした所を見る事が出来たのだろう。だからこそ、何も言い返す事が出来ない。

「少なくとも、そんな危険な場所に私たちは戻りたくありません。ですから、どうか道を開けてください」

「……それでも、私は王女として、貴女たちを逃す事は出来ません」

「……そうですか。残念です」

悲しそうにそう言う王女さまを白も悲しそうな顔をする。白もなんだかんだ言って王女さまと仲よさそうに話していたからな。

「はあ。仕方がないか」

「すまぬ。駄目じゃった」

「別にいいさ。仕方ねえって言っただろ？」

「ふむ。では、私も助太刀しよう」

「……良いのか？」

「別に問題ない。それに、私もそろそろここから出たかったしな」

そう言うシナナに視線をやった後、前方にいる三人に視線を向ける。

「ふん！ とうとう本性を出してきたな！ 魔王の手先め！ ここで俺が倒してやるー！」

「……兄さん」

「……ごめんなさい」

そう言っただけの三人も各々の武器を構える。

「シナナはあの男を頼む」

「了解」

「……私は王女さまとやらせてもらおう」

「わかった。……しっかり話せよ？」

「ああ。……わかっておる」

「じゃあ、俺の相手は……」

残りの一人。まだ迷いを持った目で俺を見る桃花を見る。

「お主もすっかりと話しておけ。もう、会えぬやもしれんからな」
「……ああ、そうするよ」

こうして、俺と白の体感では十数年ぶりの戦闘は始まった。

戦闘1

S i d e シナナ

今私は異世界から呼ばれた勇者の一人。【剣聖】冬馬と対峙している。

彼は剣を構えこちらの出方を伺っているようだ。

空殿と白殿を見てみると白殿の方は既に戦いは始まっている。

「どうした勇者殿。攻めてこないのか？」

「そうやって俺を挑発して攻撃させるつもりだろう？その手には乗らない」

別にそんな気は全く無いのだが、まあいいか。

「そもそも貴方はこの国の味方じゃないのか？どうして奴らの味方なんて」

「私がこの国の味方？馬鹿らしい。そんなわけないだろ」

「なんだって？だったら何故……」

「あの王の命令に従っていたのか、か？こちらにもいろいろと事情がある。それだけだ」

あの自爆魔法がかけられていたという事もあるが一番は……、やめよう。怒りで手元が狂ってしまったら大変だ。彼らに迷惑をかけたくない。

「それよりも貴方は何故彼らと敵対する？向こうの世界では仲間では無かったのか？」

「それはあいつらがでつち上げた記憶だと王さまが言っていた。だったらあいつらは敵という事だろう？」

私のその問いに彼は吐き捨てるようにそう言った。

「ふむ。貴方はあの王の言葉を鵜呑みにするのか？もしかしたらあの王が言っている事が嘘かもしれないのに」

「だったら何故逃げた？やましい事が無いならあの場でそう言えばいい。なのに何も言わずに逃げたという事はそういう事だろう」

あんな周りの者のほとんどが武器を構えた状態で弁明も何も無いと思うのだが。それに否定は何回も白殿が言っていたし。それを受

け付けなかったのはあの王の方だった筈だが。

「では貴方は今、彼らが弁明すれば耳を傾けるのか？」

「そうだな。……答えはノーだ」

「何故？」

私がそう問うと彼は一瞬空殿と白殿の方へ視線を向ける。

「もう彼らは王女さまたちに手を出している。だったらもう俺の敵だからだ、よー！」

そう言い終わるよりも早く彼は私目掛けて突っ込んでくる。おそらく魔法で身体強化でもしているのだろう。普通の人間が出せるスピードでは無い。

……しかし。

「……はあ」

「……なっ。これは、いつたい」

彼のスピードは徐々に落ちていき、とうとう私の目の前で止まってしまう。

彼は必死に体を動かそうとするが動く事はなく、むしろその度に苦悶の表情を浮かべる。

「な、何をした!?なんで、どうして!」

「よく自分の体を見てみたらどうだ？」

そう言われて彼は自分の体を見る。そして、ようやく気づいたのだろう。自分の体に無数に巻かれているそれに。

「なんだよ、これ!」

「糸だよ。少し頑丈で細いだけの」

強度で言えば鉄より上なんだがまあ、少し頑丈でいいだろ。

「ぐっ!くそお!うっ」

「あまり動く事はオススメしない。動けば動くほど糸がその身に食い込む。苦しむのは貴方だ」

さて、無力化もしたし私の仕事は終わりかな。準備運動にもならないのは予想外だった。

私は彼から視線を外し、未だ戦っている彼らへと視線を向ける。

「くそ!正々堂々戦え!卑怯だぞ!」

「卑怯?……ふむ」

そんな事を言っている彼に私は視線を向ける事なく言い放つ。

「私は今は【暗殺者】だ。それは褒め言葉だよ」

Side白

私は王女さまの攻撃を避けながらシナナの方へ一瞬視線を向ける。

「向こうは終わったようですよ」

「……そのようですね」

「私たちも終わらせませんか?……やつぱり、こんな事に意味は無いですよ」

正直な話をするなら私は王女さまと戦いたくはない。この一ヶ月私たちに良くしてくれたし、なにより私が珍しく気に入った人間じゃし。

「貴女たちが投降してくれるのならやめますよ」

「……じゃあ、無理ですね」

私はそう言って指を鳴らすと王女さまは炎に包まれる。

「くっ!!効きません!」

「……へえ。魔法への耐性はバッチリですか。倒れるくらいの威力でやったと思っただんですけど」

「……あの場で貴女は、転移の魔法陣を使っていました。だったら、貴女が魔法を使う事は分かりますし、その対処をするのは当然です」

ああ、あれか。確かに魔法陣を使ったし、当然ばれるか。

「今度はこちらから行かせてもらいます!」

そう言って王女さまはその手に剣を持って突っ込んでくる。

「それは悪手では?『大地よ!』」

私がそう言っていると地面が盛り上がり、私と王女さまの間に壁が出来上がる。

しかし、王女さまは止まる事なくその手の剣を一振りしただけで、

その壁を簡単に切り裂いた。

その勢いのまま私に向けて剣を振り下ろす。

「うわ、危な！」

私は間一髪でその剣を避けるとすぐに王女さまへ向けて魔法を放つ。

「『炎よ！』」

「効かないと言いましたよ」

王女さまはそう言って今度は炎を切り裂いた。

「……魔法を切るってそんなのありですか」

「この剣は少々特殊でして。大抵の魔法は切れるんですよ」

うわあ。そんなのあり？流石に面倒くさいんじゃないか。

「貴女に勝ち目はありませんよ。どうか降参してください」

「なんで勝ち目ががないなんて事になるんです？それを決めるのが些か早すぎませんか」

「貴女の本当の職業は恐らく【魔術師】でしょう？【魔術師】は近接戦に弱い。だからこそ貴女に勝ち目はありません」

「近くに來させなければいいだけです」

「どうやって？つい今しがた私に接近を許したばかりではないですか」

そう言えばそうじゃった。うわ。私の言葉説得力、なさすぎ？

「まあ、魔法以外にも手はあるから別によいか」

「……先程から気になっていたのですが、そちらが貴女の素ですか？よく喋り方変わってますけど」

「おっと、無意識のうちに出ちやっけたか。失敗、失敗」

「別に私は気にしませんよ」

「うん？あ、そう？じゃあ、こっちの喋り方でいかせてもらうかのう」
うむこちらの方が楽じゃのう、やっぱり。

「それで？いったいどうするんです？貴女が勝てる可能性は無いと思
いますか」

そう言いながらも王女さまはそこから動く気配はない。……ふむ。

「……なあ、王女さまよ。何故じゃ？」

「何がです?」

「何故、今の間に攻撃をしてこなかった?もしかしたら私を倒せたかもしれないぞ」

「……」

私の声に王女さまは答えない。しかし、苦しそうな顔で俯いている。

「……のう。王女さま。やはりやめにせんか?私もこんな事はしようない」

「私だって!……でも、貴女たちは敵かもしれないから、捕まえないと」

王女さまの叫びは後半になるにつれて小さくなっていく。

……迷っておるのだろうな。彼女もこの一ヶ月、私たちと話をしてきた。だからこそ私たちを敵と思えんのだろう。

「王女さま」

「……」

王女さまは何も言わず、こちらをただ見ている。

「少なくともそなたの憧れる『忘れられた英雄』は、そんな事で迷いはしなかったぞ」

「……え?」

「あいつはどれだけ仲が良かった奴でも敵に回れば真剣に戦った。周りが敵だと思っておる奴でも、話す意思が相手にあれば、自分の意思でその者と話す事を決め、とことんまで話し合ったぞ」

「ま、待ってください。それは、どういう……」

「さあ?知りたければ私に勝つのだな」

私は挑発するようにそう言う。あいつに憧れる者なら乗ってくる。と確信しているからこそ余裕の態度を崩さない。

そして思った通りに、王女さまは剣を構える。大きく息を吐き、真剣な目で私を見つめる。その目からは少しだけではあるが迷いが消えている。

「……なにを考えているのかはわかりませんが、一つだけ。貴女は彼の事を知っているんですか?」

「うむ。少なくともお主よりかはな」

そう言っただけでは魔力を解放する。

「さて、それでは死合おうか。互いに満足するまでのう」

戦闘2

まず最初に動いたのは王女さまだった。先程と同じように私に向かって突っ込んでくる。

「先程と変わらぬ突撃。それはもう飽きたぞ」

「それはどうでしょう、ね！」

そう言った途端王女さまの姿が消える。

「ふむ。……そこ」

そう言っただけで私は誰もいないように見える場所へ狙いを定めて腕を振る。

「え？きやあつー！」

そんな声と共に、体に何かに切られたような傷がある王女さまが現れる。

「姿が見えなくとも気配が隠せておらん。もう少し気配を隠すのだな」

「……いったい、なにが」

「なに、少し空気を弄ったのだ。その空気を刃の様に飛ばしただけよ。まあ、まだ真っ直ぐにしか放つ事が出来ないがな」

これは向こうの世界で鎌鼬かまいたちと呼ばれる現象に近い。

いろいろとこれには説があるのだが、その説の中に真空により肌が裂かれるというものがある。本来は物理的に無理らしいがそのあたりは魔法の力でどうとでもなるしな。うん。

「お主のそれは、光の屈折か。水と光の精の力を感じるしう。王女さまは魔法も達人なのだな」

「……ただ腕を振っただけ。詠唱も無しにこれだけの威力の魔法を放っておいて何言ってるんですか」

「そんな大それた魔法を放ったつもりは無いが？」

「……私の今の装備は魔法への耐性だけはかなり高い筈なんですけどね」

そう言っただけで王女さまはジトつとこちらを見る。え、本当にそんな大それた魔法は放ってないんじゃないか。あれで高いとか、えー。

「貴女は本当に何者ですか。これだけの【魔術師】今まで見たこともない。それにあの英雄を知っているなんて……」

「勝つたら話してやると言っただであろう。それに今は死合いじゃぞ。話す暇がお主にあるのか？ほれ」

「くっ！また！」

私が腕を振るのを見て王女さまは咄嗟に横に避ける。

しかしそれは予想済み。

王女さまが移動した際踏んだ大地が爆発する。

「きゃあっ!!」

「話に集中しすぎて周りの警戒が疎かになってしまっただけは駄目じゃろ」

爆煙が晴れると、体の所々に煤をつけながらも王女さまは未だ立っていた。

「どうする？降参するか？」

「……貴女たちを捕えるまで、降参なんて」

「お主のその心にも無い言葉も聞き飽きたぞ。いい加減本心を出したらどうじゃ？」

「ツツ！なにも、知らないくせに！」

そう言ってもう一度彼女は突っ込んでくる。

……怒りに身を任せた突撃。見込み違いだったかのう。

「愚か者」

そう言っただけ腕を振り、鎌鼬を飛ばす。

「『火と水の精よ！』」

彼女がそう言うのと彼女を中心に彼女の周りが濃い霧に包まれる。

そして私の放った鎌鼬がその霧を払う。

「そっ！」

そう言っただけ彼女が振った剣によって鎌鼬は切り裂かれた。

「……ほう」

なるほどのう。霧によって鎌鼬の大まかな速さと位置を把握し、それに合わせて剣を振るったのか。この短時間で考えたにしてはなかなか。

「はああああ!!」

そして私のすぐ側まで迫っていた王女さまが剣を私に向かって振りおろす。私はそれを半端後ろに下がる形で避ける。

「ふふふ！やはりお主はおもしろいのう！」

「貴女の技は封じましたよ！」

「たかが一つの魔法を破った程度で大袈裟じやのう」

次に来た横薙ぎの一撃は逆に肉薄し、剣を持つその手を掴む。

「なっ!?このっ！」

「悲しいのう。そんな必死に逃げようとしてもよかろう?」

「くっ!だったら!」

必死で私の手から逃れようと頑張っておるが、今の私は力を魔法で上げておるから逃れることは出来んよ。

彼女は私の手から逃れられんと悟ったのか、空いているもう片方の手から魔法を放とうとしてくる。

「まあまあ、少し落ち着け」

「……嘘、なんで」

突如その手から魔法が消え彼女は狼狽える。

「なに、ちよつとそちらの魔法に干渉しただけよ。あ、それと、もう少し緻密に魔法を組み立てた方が良いぞ?今の様に干渉されてしまう事があるからのう」

私がそう言うと王女さまは少しの覚悟と後悔、そしてどこかほっとしているかのような目でこちらを見る、

「私を、どうするのですか?」

「なに、少し話をしようとな」

「……話す事など何もありません!」

「またもやそんな薄っぺらい、心の籠らぬ言葉を吐く。……いい加減イライラしてくる。空の奴だつてここまで捻くれておらん。」

「いい加減くどい。これはあまり使いたく無かったがしかたないかのう」

「何を言って……」

『魔眼よ』

そうやって私は自身の眼へと魔力を流す。それにより今私の眼は金色になっておることだろう。

「その、眼は」

「本音で語ろう。王女だとかなんだとかは関係なく、ただのカノンと白として」

「いったいなにを」

「お主はどう思っておる。本当に、私たちを敵だと疑っておるのか」

「それは……!?!」

そこまで言った所でカノンは気づいたのか、驚いたように慌てて口を閉じようとするが、もう遅い。

あとは申し訳ないが、その口が彼女の本音を勝手に話してくれる。

「わ、私、は」

「うむ」

未だに抵抗しておるようだが、その口は勝手に動く。

「私は、貴女たちが敵だなんて、思えない」

「……」

私が黙って言葉を聞き、彼女は続ける。

「この一ヶ月、図書館に行くといつも貴女たちがいて、嫌な顔せず迎えてくれました」

「……」

「……まあ、王女である筈の私にたまに遠慮なく、とても失礼な事を言う時がありました」

「あ、それは本当にすまん」

突然の王女さまの嫌味に反射的に頭を下げる。

昔から王女とかそういう立場の者にも変わらない態度でいたせいか、たまにカノンにも似たような態度を取ってしまう時があった。そういう時は全力で謝ってはいたのだが。あれ?これって事と次第によつては死刑ものでは?!

そこに行き着いた所でカノンが笑っていることに気づく。

「ふふ。別に気にしませんよ。むしろ嬉しかったです。……私と話す方々は貴女たち以外皆よそよそしかったので」

そう言う彼女の姿はどこか寂しそうに見える。

「でも、そんな貴女たちは正直で、裏表がないように私には見えませんでした。だからこそ、私には貴女たちが魔王の配下だなんて思えなくて……」

そう言つて彼女は俯いてしまう。その頃には彼女から戦意も、抵抗しようという意志も感じられなくなっていたので私は彼女の手を掴んでいた手を離す。……もう眼を使う必要もあるまい。

「貴女たちは、敵じゃ、ないですよね？」

そう言う彼女の声は震え、瞳は揺れている。きつと、私たちを信じたいと思つているがやはり不安なのだろうな。

だからこそ私は安心させるように彼女の頭に手を置き撫でながら告げる。

「敵ではないよ。そちらが手を出さん限り、私と空は敵にはならん」

「本当ですか？」

「ああ。私の名と誇りに誓おう」

私がそう言つると彼女は安心したように笑う。

「よかつ、た。あれ？」

「おっと」

そこまで言つたところで彼女はバランスを崩したかのように私の方へ倒れてくる。

「あれ？なんで」

「ずっと気を張つておつたし、いくら魔法耐性のある装備をしていてもあれだけ私の魔法を食らつてあればそうなるさ。むしろこれまで倒れなかつた事が驚きだぞ？」

いや、本当に。正直いくら耐性をつけているとは言え爆発の時点で、あ、やりすぎたかな？とか思つてちよつと焦つたし。

「本当に、貴女はなんなんですか」

そう呆れたように聞いてくる彼女に向けて私はいたずらっぽく笑つて答える。

「なに。ちよつと昔に悪さをしすぎた、ただの龍もどきじやよ」「はい？」

眼を見開きそんな声を出したカノンの珍しい顔を見て私は大きく笑うのだった。

終戦

時は遡り、シナナが戦闘を始めた頃。

俺、桜木 空は妹である桜木 桃花と向かい合っていた。

桃花は自分の武器であろう刀をこちらに構え、敵意を向けてきはするが、その場から動く気配はない。

「はあ。なあ、桃花よ」

「……なに？」

「お前、やる気が無いなら下がってろよ。俺もそんな奴とやりたくないし」

俺が呆れながらそう言うと桃花は苦しそうな顔をする。

……俺と戦うことに対する迷い。向こうの世界での俺との記憶が偽物かもしれないという不安。最もその胸の内を占めているのはその二つって所か。だからなのかむけられる敵意も薄い。

「……甘いなあ」

「え？」

「いや、なんでも」

無意識で漏れた俺の声は小さく桃花に聞こえる事はなかった。

……本当に甘い。今のだつてそうだ。本人は疑っているが、まだ桃花の中で俺は家族なのだろう。だからなのか俺の小声に反応した時、一瞬だが敵意が消えた。戦場で、一応とはいえ敵の前でだ。そんなのは殺してくださいと言っているようなものだろう。まだまともな戦闘訓練をしていないにしても甘すぎる。

「……兄さんは」

「ん？」

俺が少し黙っていたからか今度は桃花が話しかけてくる。

「兄さんは敵なの？私の中にある記憶は本当に偽物なの？」

桃花は俺に否定してほしそうにそう聞いてきた。俺と桃花は本当に家族だと。敵なんかじゃないと。俺の口からその言葉を聞いて安心したいのだろう。

でも……。

「敵だ。と言ったらどうする?」

そんな甘えは許さない。

「俺たちは本当の家族じゃない。その記憶は偽りだ。と言ったらお前は どうする?」

「にい、さん? な、なにを、言つて」

俺の口から発せられた言葉に眼を見開き、喉を震わせながらそれだけを口にする桃花。自分の望んだ答えと真逆の事を言われ、その言葉を理解したくないとあいつの頭が拒んでいるのだろう。

その姿を見るのは心苦しい。でも、この世界で生きていくのならなんでもかんでも答えを聞くだけじゃあ駄目なんだ。自分で考え、行動し、そして自分の力で解を得なくてはならない。だからこそ、俺は桃花の望む答えを与えない。

代わりに俺は手を前に出しその名を口に出す。

『影狼』

その言葉に呼応するかのように俺の影が手の中に集まり出し刀の形を作る。そして影が晴れると俺の手に一本の黒い刀が握られていた。

俺はその剣先を桃花へと向ける。

「……元から、ちゃんと話をしようとしていたのが間違ってたのかもな」

俺はそう言つて口元に笑みを浮かべる。

本当に俺らしくない。そもそも、俺も桃花もどっちも口下手だしな。

「その、刀は……」

「さあな。それより」

俺はそこまで言つたところで少しだけ殺気を放つ。

その殺気に当てられて桃花は数歩後退る。

「そろそろ本気で来い。でないと、死ぬぞ」

「わた、私、は」

「戦いたくない、か? それじゃあ、駄目なんだよ。これから先、親しくなった奴と敵対するかもしれない。殺し合うことになるかもしれない」

い。そんな時、その甘さは邪魔だ。いつかその甘さによって死ぬ事になる」

「そんなことっ!」

「あるんだよ。この世界。いいや。どの世界でも戦争をするなら少なからず起こり得ることなんだ」

そして俺は、お前に死んでほしくないから敵になる。恨まれようと構わない。それでも俺は、

「行くぞ、桃花。兄として、先立として、お前に教えてやる。世界の理不尽を」

そして現在。俺は白の笑い声を耳にしながら、地面に片膝をつける
桃花を見下ろしていた。

「向こうは終わったらしいな」

「はあっ、はあっ」

俺が声をかけても桃花は肩で息をしており、とても会話が出来そうな状態ではない。

「どうした? もう終わりか? まだ準備運動程度にしか動いてないんだが」

「はあっ。くっ! 『水の精よ!』」

桃花がそう言うのと桃花の後ろに水で出来た槍が現れ俺に向かって飛んでくる。

「効かねえよ」

俺はそれを『影狼』を横薙ぎに振るい、切り落とす。

その時魔法の方に視線を移した俺に、桃花はその手に刀を待って斬りかかる。

「それで隙をついたつもりかよ」

「っ、のー!」

俺はそんな桃花の攻撃を問題なく防いだことで鏢迫り合いになる

と、桃花は無理矢理力で押し切ろうとしてくる。

「はあ。『影よ』」

「がつーなに、が?」

後ろから脇腹を貫かれた桃花が驚きの声を上げて後ろを振り返ると、桃花の後ろに伸びた桃花自身の影から槍のように先が尖った影が伸びていた。

「なに、これ」

「俺の魔法、のようなもんだ。影だったら大抵なものは操れる」

脇腹を抑え苦しそうにする桃花にそう説明すると、その表情を更に苦しくさせる。

「なによ、それ。影の魔法なんて聞いたことないんだけど。ずるくない?」

「そうか?今のなんていつものお前だったら避けられただろ」

さっきの桃花は焦っていたせいで注意力が散漫になっていた。だからあんな攻撃も避けられなかった。……どうせ王女さまが心配になったんだろうけど。それで、自分が危なくなっただから本末転倒もいい所だ。

俺は動かずに脇腹の傷を魔法で塞いでいる桃花を見つめる。そんな桃花の体には無数の切り傷があり、そこから血が流れている。

「他の傷も直していいぞ。待ってやるよ」

「どうせそんな魔力残ってないことわかってるでしょ。本当、そういう意地悪な所も記憶のまんま」

そこで何故か桃花は少し笑う。

「……なんで笑う?今、笑う要素あったか?」

困惑しながらも俺は桃花に問いかける。やばい。やりすぎて頭がおかしくなったか?だとしたら、え、どうしよう。

「ちよつと。なんか失礼なこと考えてない?」

「……いや、全く」

「せめて、目を逸らさずに言っつてよ」

そう言っつたため息を吐く桃花からは先程までの敵意が無くなっつており、落ち着いたような雰囲気を出している。

「……なんだよ。諦めて死ぬ覚悟でも出来たか」

「……はあ」

俺がそう言うと、桃花はもう一度ため息を吐いた後ジト目で俺を見てくる。

「あのさ、兄さん」

「なんだよ」

「似合わないよ。そういうの」

「……はあ？」

突然桃花から告げられた言葉に俺はそんな気の抜けた声を出してしまう。

いや、突然どうしたんだ。自分の立場わかってないのか？

「お前、この状態でよくそんな事ほざけるな。俺の手によって死にそうになっただぞ」

「そこもだよ。本当に似合っていない」

「……お前はさつきからなにを」

「だって……」

俺の言葉に被せるようにそう言った後、一呼吸置いてその先を口にする。

「だって兄さん、私を殺す気ないでしょ」

「……」

桃花のその言葉に俺は咄嗟になにも言い返す事ができなかった。

そんな俺に構う事なく桃花は話し続ける。

「まったく。世界の理不尽を教えてやるーとか、私の考えは甘いーとか言うくせに甘いのは兄さんの方じゃん」

「……なんでそう思う」

「うん？だってさつきから兄さん、私に致命傷を与えてないでしょ？ さつきの脇腹への一撃も、見た感じ致命傷っぽいけど、私の残りの魔力で直せるくらいの傷だったし」

「……たまたまだろ。そんな事で」

「それと」

桃花はそう言うってから俺に背を向けて数歩下がった後、俺の方へ振

り返る。

「殺そうと思えば殺せたでしょ？最初の段階で」

「……そんなこと」

「……流石にわかるよ。今の私と兄さんの間にな力量差があることくらい」

桃花はそう言つて悲しそうに微笑む。

「それともう一つわかった事があるの。兄さんは敵じゃない。向こうの世界の記憶も全部本物だつて。だつて変わらなすぎるもん。向こうにいた頃の兄さんと。だから、嘘をついてるのは王さまの方なんでしょ？」

「……」

「やっぱり。そうなんだね」

今の戦いの中でそこまで考えてたのか。やっぱりこいつは凄いな。俺が桃花の立場だつたらそこまで考えてる暇はなかつただろう。

「でもね。王女さまは、多分なにも知らないと思うの。あの人は汚い嘘をつけるような人じゃないから」

真剣な顔でそう言う桃花の姿に俺は口を挟む事ができない。その顔は桃花と過ごしてきた今までで見た事のない顔だつた。

そして桃花はその手に持つ刀を俺に向けて構える。

「だから、私は王女さまの側にしようと思う。兄さん達について行きたいって気持ちもあるけど、王女さまが心配だから」

「……そうか」

「うん。だから、これが最後の一戦。兄さんとの決別の一戦。」

約束。まだ守ってもらってないからね」

そう言われて思い出す、転移した日の朝の出来事。……そう言え
ば、そうだったな。

俺は約束の事を思い出し、笑みを浮かべる。

「わかった。いいぜ。今度は俺の本気で相手してやる」

「うん。ありがとう」

「ルールはどうする？」

「もう私の体力も無いし、一撃。互いに一撃を放つて立っていた方の

勝ち。それで、どう?」

「オーケー。単純でわかりやすい」

「うん。それじゃあ開始の合図は……」

「私がやってやろう」

突然聞こえてきた声に俺も桃花も声のした方に視線を向ける。

そこにはこちらに近づいてくる白の姿があった。

「なんだ、白か」

「なんだとはなんじゃ。失礼な奴じやのう」

「王女さまは?」

「カノンの奴は休ませておる。だいぶ魔力を使っておったからな」

そう言っつて後ろを向く白の視線の先を見ると座っつてこちらを見て

いる王女さまがいた。その側にはシナナも立っつている。

「カノン、ねえ。仲良くなっつたもんだな」

「まあ。それよりも今はこちらのことだろう? 始めの合図は私が

やっつてやるから、存分にやるがよい」

「ああ。ありがとよ」

そうしてもう一度桃花の方を向く。

「んじゃあ、改めて」

「うん」

「よいな。では」

そう言っつて白は片腕を上げる。

「兄さん」

「ん?」

「……ありがと」

桃花がそう言い終わっつたと同時に白が腕を振り下ろす。

「始め!」

「桜花流剣術、奥義!」

桃花がそう言う姿を見ながら俺は刀を鞘に納め、居合の構えを取る。

「……星竜剣術。天の型、居合」

俺と桃花の視線が交差する。

「佐久夜！」
「極夜！」

そして振るわれる互いの刀。一方は桜が舞い、一方は世界が黒く塗りつぶされる光景を幻視する。
その一戦の勝敗は……。

「そこまで……この勝負、空の勝ちじゃ！」
俺の勝利で幕を閉じた。

旅立ち

……なんとか勝てたか。

俺は白の言葉を聞きながらそう思う。その時、ふと左頬に違和感を覚えたのでその箇所を手を当て、その手を見てみると少しだけ血が付いていた。

「あーあ。また、負けちゃったかあ」

仰向けに倒れている桃花がそう呟く。その声は悔しそうな、しかし満足したようにも聞こえる。

俺はそんな桃花に近付き声をかける。

「強くなったな」

「それ、勝った人が言うのと嫌味に聞こえるよ」

「ばっか。これは素直な称賛だよ。嫌味でなんか言うわけねえだろ」

「ふふっ。わかってるよ。でも、悔しいなあ。最後まで、勝ちたかった、なあ」

そう言う桃花の声は最後になるにつれて掠れ、時折鼻をすする音も聞こえる。

「本当に馬鹿だなあ」

「……」

「最後じゃない」

「え?」

「悔しいなら、また俺に挑めばいい」

その言葉を聞き桃花は視線を俺に向ける。

「無理、だよ。だって、兄さんはここを出ていくんでしょ?」

「何言ってるんだお前は。別にもう一生会えないわけじゃないだろうが。会えたらいつでも受けて立ってやるさ。それに……」

俺はそこまで言っつて、白に連れられてこちらに近づいてくる王女さまへと視線を向ける。

「お前は王女さまの側にいるんだろう? だったら恐らく、そう遠くないうちにまた会えるさ」

「それって、どういうこと?」

桃花のその問いに俺は答えず、笑みを返すだけにとどめる。

そこで白と王女さま、シナナが俺たちの側に到着する。

「お疲れ様です。お二人とも」

「うむ。お疲れじゃったのう。妹殿。それと空」

「それとつて俺はついにかよ」

「ふっ。しつかりとわだかまりが解けたようでよかったではないか」

「……まあな」

「ふふ。まったたく。愛い奴よのう」

白は俺にそう言つて微笑みながら俺の頬についた傷を治す。なんとなくその雰囲気居心地悪くて白から視線をずらすとシナナが視界に入る。

「お前もお疲れさん」

「……いや、そこまで大したことはしていない。相手もかなり弱かったしな。あれなら、そこらの少し頭の回る盗賊の方が手強い」

「これはまた手厳しい評価だな。……ところでお前が相手したあいつは？」

俺たちの近くにはその姿は見当たらないし、いったいどこ行ったんだ？

「ああ。少しうるさかったので意識を刈つて隅っこに置いておいた」

「あ、そう。悪いな。何から何まで」

「気にしないでくれ」

まあ、特に興味を惹かれる奴でもなかったしどうでもいいや。

俺はそこでシナナとの話を終わらせ、今度は話をしている桃花と王女さまに話しかける……と、その前に。

「白、悪いんだが桃花の傷治してくれないか。俺その手の魔法は苦手だし」

「構わんぞ。まだ魔力もかなり残つておるし」

白はそう言つて桃花に近づくとその体に触れる。すると触れた場所から淡い緑色の光が発生し、数秒後には桃花の体に無数にあった傷は綺麗に消えていた。

「うそ。もう傷が」

「私も先程かけてもらいましたが、本当に驚きました。我が国で最も回復魔法に長けているものでもこんなに早くは出来ません」

「この程度、ちよつとコツさえ掴めれば誰でも出来るものよ。そんな大したものでもない」

「と、言いながらも得意げな表情をする白なのであった」

「……黙れ、ハゲ」

「……ロリババア」

「……ハハハ。死ね！」

「……いい加減にしろ、お前たち」

互いに殴ろうと拳を振り上げるが、間にシナナが入ってきたので拳を下ろす。

「……チツ」

「……はあ」

俺たちのそんな姿を見て深いため息を吐くシナナ。……なんか、ごめんね。

「あ、あのー」

「うん？」

俺たちがそんな馬鹿をやっていると王女さまが声をかけてくる。その声に反応して王女さまを見ると、心なしか緊張しているようにも見えた。

「貴方たちは本当に何者なのですか？もう貴方たちが判定通り【村人】であるなどとは信じていません。白さんの異常なまでの魔力と卓越した魔法、そして恐らく彼女の眼は魔眼なのでしょう？」

王女さまのその言葉にチラツと白の方を見ると、舌を出しテヘツと漫画で見るような仕草をしていた。……とりあえず冷めた目で見ておこう。

すぐに王女様の方へ視線を戻し言葉の続きを聞く。

「そして空さん。貴方もです。まだ訓練の日が浅いとは言え【剣姫】であり【賢者】である桃花さまを圧倒してみせました。こんな事は前例がありません」

「前例が無いだけで今回たまたまそうだったかもしれないですよ？」

【村人】が勇者を倒す！なんて、憧れる展開じゃないですか」

俺が少し軽い調子でそう言うと、王女さまは目を細め俺に一步近づいてくる。

「そうですか。……ああ。それと、実は白さんが少し面白い話をして下さったんです」

「え、ちよ、カノン!？」

「先程白さんが自分のことをこう言ったんです。ちよつと昔に悪さをしすぎた、ただの龍もどきと。これってどう言うことなんでしょうね？」

王女さまのその言葉を聞き、今度は本気で白の方を睨む。俺に睨まれた白は両手を合わせ、目線で「すまん」と伝えている。

俺はそんな白に対し、ため息を吐いて改めて王女さまを見る。

「……もしかしてなのですが、白さんは。だとしたらそんな白さんと対等に話をし、協力している貴方は、いえ、貴方さまは!？」

「はい、ちよつとストップ」

王女さまが少し興奮しながらそこまで言ったところで、俺は王女さまの口に手を当てて喋れなくする。

「申し訳ないんだけどそつから先は今は秘密だ。まあ、ほぼほぼ答えを言ってるようなものなんだけど、あんたは俺や白のことを知らなさすぎる」

そう言うってから俺が手を離すと王女さまは少し落ち着いたのだから。目を閉じて一度深呼吸をした後俺の目を見つめる。

「……知らなさすぎる、とは?？」

「言葉通りの意味だよ。あんたが『忘れられた英雄』に憧れのようなものを持つてるのは知ってるさ。でもな、そいつのやってきた事を細かくは知らないだろ」

「それは……」

「だからこそ、あんたは知るべきだと思う。もっと詳しく、その英雄のことを」

そう言うと王女さまは期待するような目で俺を見てくる。

「も、もしや!貴方さまが私に真実を」

「落ち着きなさい」

「あうー！」

「またもや興奮した様子で、今度は顔を近づけてきた王女さまの額にデコペンをして黙らせる。てか、興奮しすぎだろ王女さま。どんだけ好きなんだよあの英雄のこと。」

「言っておくが、まだ俺たちは何も教えない」

「な、なぜですか?」

額を抑え涙目になりながら王女さまはそう聞いてくる。

「あんたは世界を知らなさすぎるって言っただろう? だから、今から言うのは俺と白からの課題」

「その課題とはいったい?」

「あんた自身の足で、調べろ」

「私自身の足で?」

そう言っって首を傾げる王女さま。

「王女さまってこの城の外の世界を見たことある?」

「……いえ。それは止められていたので」

「だろ? 王女さまがいつも図書館で話してくれたことを聞いてたらなんとなくわかる。だから、これを機に一度外の世界を見てくるといい」

俺がそう言くと王女さまは顔を伏せ暗い声になる。

「……で、でも、お父さまがいいと言うかわかりません」

「そこをどうするかもあんた次第だ。本当にあの英雄について知りたいたらなんとかするんだな」

酷いかもしれないが、あの狸に従い続けてたら駄目だ。今回の嘘や、俺たちを捕らえようとしたことからあの狸は何か企んでる。だからこそ、王女さまはなるべく早くあの狸から離れ、この世界のことを知るべきだ。

未だに俯いて顔を上げない王女さまに再度言葉をかけようとしたが、先に口を開く者がいた。

「カノンよ」

「白、さん」

白からの突然の言葉に王女さまはその顔を上げ白を見る。

「正直に言おう。私と空はお主の父を疑っておる。今回私たちを捕らえようとした事もあるが、召喚されたあの日から少なからず疑っておった」

「……」

「お主もおかしいと思つたことはないか？お主の父が何かそなたに隠し事をしていると思つたことはないか？」

「……それは」

心当たりがあるのだろう。王女さまは白から視線を逸らし答えずらそうにする。

「だから、今回のこの課題はそなたとあの王を離すことも理由の一つなのじゃ」

「……はい」

「だが、それは一番の理由では無い。むしろあまりその事は考えておらんかったのだ」

「え？」

「一番の理由としてはな」

そこまで言つて白は微笑み、王女さまの頭に手を乗せる。

「あの英雄に憧れる者にもつとあやつの事を知ってもらいたいと思つたからなのだ」

「……そ、それなら」

「うむ。だったらここで言えと言う話なのだかな。まあ、ぶっちゃけ私と空はまだそなたの事を認めておらん！」

「え、あの、それは」

「なにもかも幼稚なそなたに、かの英雄の事を話すなどありえんなあ。それでは英雄の凄さの一割も理解できん」

「そ、そんな事！」

「だからこそ！」

そう言つて一度チラリと俺の方へ視線を向けた白だったが、すぐに王女さまへ視線を戻す。

「自分自身で英雄の事を知ってもらいたいのだ」

「なんで……」

「あれじゃよ。人が育てた野菜と自分が育てた野菜だと自分が育てたやつの方が美味しく感じる、みたいな」

まあ、つまりはじゃ。そう言つて王女さまから手を離し、俺の隣へとやってくる白。

「世界を知れ。それが英雄を知る一番の近道じゃ」

「……」

黙りながらも俺たちの方をまっすぐに見つめる王女さまの瞳からは先程の迷いや不安は感じられなかった。

「……大丈夫そうじゃな。それでは行く場所のヒントをやるうかの」

「ヒント、ですか？」

「ああ。ではヒントじゃ。あの絵本に名を書かれた国へ行け。恐らく、なんらかの情報はある筈じゃ。……さて」

そう言つて白は百八十度体を回転させ出口の方へ体を向ける。

「そろそろ行くうかのう。兵士たちが来るかもしれんし」

「ああ、そうだな。シナナは」

「……もちろんついて行くさ」

その言葉を聞いて俺とシナナも出口の方へ体を向け、既に歩き始めていた白の後を追う。

「兄さん！」

しかし、俺を呼ぶその声に俺は足を止め振り返り、声の主、桃花を見る。

桃花は涙を流しながら、しかし笑顔で、言葉を紡ぐ。

「またね。今度は勝つから、それまで死なないでよ」

「怖いこと言うなよ。……ああ。俺は死なないよ。だから、お前も死ぬなよ」

「うん」

そう言つて、今度こそ立ち止まることなく俺はその場を後にしたのだった。

秘密の通路を出るとそこは森の中だった。

夜空には星が輝いており、辺りからは川のせせらぎが聞こえるのみで、人の気配は感じられない。

「ここはいったい?」

「……ここはあの城から少し離れた森の中だ。周りに兵士の姿は無いな。よかった」

ナイフを持ち、辺りを警戒しながらそう答えるシナナ。

白の方を見ると大きく伸びをしていた。

「ふう。やつとあの穴から出てこれたのう。さて、これからどうする?」

「うーん。特に急ぐ事も無いし。今のこの世界を見て回ろうと思ってるんだが。シナナはどうするんだ?」

俺がそう問いかけるとシナナはナイフをしまいながらこちらに近づいて来る。

「……そう、だな」

少しの間考えるそぶりを見せた後こちらに顔を向ける。

「……お前たちに頼みたい事があるのだが、いいだろうか?」
「いいぞ」

「うむ。よいぞ。して、何をすればいい?」

俺たちが即答するとシナナは驚いたような仕草を取る。

「……そ、即答。頼もうとする身で失礼かもしれないが、もう少し迷ったり、せめて内容を聞いたたりしないのか?」

「別に。お前には助けてもらった借りがあるしな」

「そうじゃのう。私たちは基本貸し借りを作りたく無いからのう」

「……し、しかし、お前たちはこの世界を見て回ろうと思っっているのは」

「そんなの後でも出来る。それよりも貸し借りを無くす方が大切だ。

なあ?」

「うむ。ほれ、遠慮なく申してみよ」

「……そ、そうか。わかった。それで納得しよう」

そう言っつて一度咳払いをした後シナナは俺たちに告げた。

「人類の最終防衛ライン。人族の大国、『アスタリスク』。そこへ私と共に来てはいただけないだろうか?」

旅立ち 桃花 side

兄さんがこの城を出て行って早二週間。

私、桜木 桃花は王城の図書館で『忘れられた英雄』を読んでいた。二週間前のあの出来事から私はカノンの護衛になった私は最近一日の大半をここで過ごしている。

ちなみに私のカノン呼びは向こうから頼まれた。友達なのに王女さまは他人行儀で嫌らしい。そのかわり私も名前を呼び捨てで言うように約束させたんだけど。

現在図書館には私以外人はおらず、ただ私が絵本のページをめくる音だけが木霊する。

それにしても本当にこの絵本に書かれた英雄が兄さんなのかな？私の知る兄さんは誰かを恨むような性格じゃないし、英雄と言われるほどしっかりしてもいない筈なんだけどなあ。

私が本を読んでいてそんな事を考えていると図書館のドアが大きな音を立てて開かれた。

「もう！どうしてお父さまはあれほどまでに頑固なのでしょう！本当に、頭にききます！」

「……あはは。その様子だとまた駄目だったみたいだね」

苦笑いを浮かべながら私が彼女にそう声をかけると彼女は頬を膨らませた。

「聞いてくださいよ、桃花。お父さまったら酷いんですよ！私が外に出たいと言っても危険だから駄目の一点張りで」

「まあ、それだけカノンを大切に思っているとも取れるけど……」

私がそう言うときカノンはその表情を曇らせる。

「……確かに、それなら私もまだ納得はできるんです。でも、お父さまのあの表情や物言いは、恐らく」

「……何かを隠してる？」

「……はい」

カノンが表情を暗くしながらそう言う。兄さんたちに言われてからカノンは王さまの表情をよく見るようになった。それから今日

みたいのに暗い表情をすることが増えたように思う。

「大丈夫？」

「ええ。空さんと白さんから聞いていた通りなのでそんなに辛くはありませんよ」

そう言つて微笑む彼女を見て少し安心してホッと息を吐く。

友達には笑顔でいて欲しいからね。

「さてーそれではもう一度あの本を調べてみましょう！白さんが言つてくれたのです。きっと私たちが見落としているだけで何処かに国の名前が書かれているに違いありません！」

「うん、そうだね。……でも」

私はそう言つて改めて手元にある絵本。『忘れられた英雄』に視線を戻す。

そう。あれから二週間。白さんが言つた事を聞きこの本を何度も読んでみたが国の名前が一切書かれていなかったのだ。一応念のために透かして見たり、何かの暗号が書かれているのかもと探してみたりもした。しかし、私たちは何も発見できずにいたのだ。

「はあ。一体どこに国の名前が書いてあるのよ」

私は一度本から目を離し天井を仰ぐ。天窓から漏れる月の光は神秘的で心が癒される。

「……昔はその名前だったけど今は違うとか無いかなあ」

「いえ、その可能性は無いかと。空さんと白さんはこの図書館の歴史書はだいたい読み終えたいので、もしそうならそう言うでしょうし。それに確か二百年前から現在まで存在し続けている国は全て名前を変えていなかった筈です」

「……歴史書って確かあの辺りの本棚だよね」

「はい」

「まじかー」

そう言つて私が目を向けた先には二階ぐらいの高さの本棚。それが横にずらっと並んでいた。見た感じ二百冊以上は余裕であるだろうそれをあの二人は一ヶ月で読んだのか。うわあ。

そんな気持ちが顔に出ているのだろう。私の顔を見たカノンは苦

笑を浮かべていた。

「その辺りも普通じゃ無いですよねえ」

「それが本当ならあの二人は本当に化け物だよ」

そう言っただけ私たちは互いに笑い合う。うん。さつきよりもカノンの表情も良いし、これはこれで良かったかな。

「少し、休憩にしましょうか」

「うん。そうしょっか」

そう言っただけ私がカノンの側に行こうと席を立った時だった。

図書館の扉が開き、珍しく私たち以外の人がやってきた。

「ああ！桃花さん、ここにいたんだあ。探しましたよお」

彼女はそう言うのとゆっくりとした足取りで私の方へ歩いてきた。

「貴女は、確か……」

「あ、あんまり話したことないですよねえ。私、空くんのクラスの担任をしております。神墮かんだ天そらって言います。気軽に天先生とか天ちゃんとか呼んでねえ」

そう言われて思い出した。そうだ。召喚されたあの日に遅れて教室に入ってきた先生だ。

「あ、すみません。えっと、改めまして桜木 空の妹の桜木 桃花です。兄がいつもお世話になってました」

そう言っただけ私が頭を下げようとする天先生はそれを手で制した。

「頭なんて下げなくて良いよお。私の方が彼に助けられてたからあ」

「いえ、でも……」

「それより、最近全然姿を見かけないから心配したよお。たまには顔を見せてねえ？」

「す、すみません」

そう言っただけ本当に心配そうな顔をする天先生を見て反射的に謝っていた。

この人の雰囲気の子を見守るお母さんに似ているからかもしれない。

話してみる限りとても良い人そうだし、これからはなるべく顔を見せるようにしようかな。

「うふふ。わかってくれればいいのよお。……あら？」

優しい笑みでそう言う天先生は何かに気づいたかのような顔をする。

「……その本はあ？」

「え？ああ。これですか？ただの絵本ですよ」

私がそう言っただけで本を掲げると天先生は私に近づいてきてその本へ手を触れた。すると天先生の視線が少し鋭くなった。

「……ふうん」

「えつと、どうしたんですか？」

「うん？ああ。ちよつとねえ」

その視線が気になり私が声をかけると先生は視線を元に戻して私に微笑んだ。

「この本。ただの絵本のはずなのに魔法がかけられてるのよお。だから少し気になってねえ」

「それは本当ですか!？」

先生のその言葉を聞きカノンがものすごい勢いで先生に近づく。その勢いに流石の先生も数歩だけ後ずさる。

「え、ええ」

「でも私は何にも感じませんでしたよ」

「その魔法かなり緻密に作られてるから多分【賢者】の桃花ちゃんじゃわからなかったんじゃないかなあ」

「……そう、ですか」

「うん。本来【賢者】は魔法面じゃなくて知識面に優れているらしいからねえ。分からないのも無理ないよお」

「でもどうして先生には分かったんですか？」

私が思ったその疑問に答えたのはカノンだった。

「それは恐らく神堕さまが【魔女】だからではないでしょうか」

「多分そうだと思うよお。【魔女】は魔法面に優れてるからあ」

「それよりも神堕さま。この絵本にかけられた魔法を解くことは出来ますか？」

「はい、出来ますよお。そもそも、この魔法は見つけるのが難しいだけ

で解くのは簡単に出来るようになってますからあ。桃花ちゃんその本貸してくれるう?」

「は、はい」

そうして私から渡された本を先生は机に置き本に向けて手を伸ばすと何かを呟いた。

すると絵本が光り始めたがすぐにその光は消えていった。

「はい、おしまい。これで魔法は解けてると思うよお」

その言葉を聞いたカノンがすぐに本を手にとると本を読み始めた。

その間私と先生は黙ってカノンを見ていたが、突然カノンが本から視線を外し私を見た。

「桃花」

「な、何かわかった?」

「はい。行くべき場所も。何を調べるべきなのかもわかりました」

「一体どこへ行けば?」

「はい。私たちが行くべき場所。それは、人族の大国『アスタリスク』です!」

そう言うカノンはどこか興奮したようにその口に笑みを浮かべている。

その顔を見て私も嬉しくなる。やっとカノンが行くべき道を見つけれられたのだ。友達としてこれほど嬉しいことはない。

「ねえ、ねえ。なんの話い?」

その声で私とカノンはこの場にもう一人人がいることを思い出した。

「あ、えっと、その」

「……もしかしてだけど、桃花ちゃんも何処かに行っちゃうのお?」

「……はい」

私がそう言うのと先生は見るからに悲しそうな顔をする。

思い返してみれば兄さんがこの城から出て行った事を兄さんのクラスの人たちに話した時もこの人だけは悲しそうな顔をしてくれた気がする。

「うん。しょうがないかあ。これが血は争えないってやつなのか

なあ」

「……先生。その」

「大丈夫だよお」

「え？」

「うふふ。頑張ってきてねえ。応援するよお。空くんの妹さんだもん。空くんがいない今、私は絶対貴女の味方になるからあ」

「……ありがとうございます」

その言葉に少し泣きそうになってしまう。

ああ。なんて優しい人だろう。私もこの人の生徒になりたいと今本気で思ってしまうくらい良い人だ。

「……そうと決まれば急いで城を出しましょう！時間がありません」

「え？でも、カノン。確か王さまから許可が」

「あれだけ言って無理なら一生許可はおりません。だったら何も言わずに出て行ってやります。家出です」

「え、ええ!?ちよつ、それはまずいんじゃない」

「別に問題ありません。バレなければ良いんですから」

「いや、でも出るにしたって準備が」

私がそう言くとカノンは悪い笑みを浮かべる。

「ふっふーん。こんなこともあろうかと！」

そう言つて近くの本棚まで近づくと一冊の本を抜き取った。

するとその本棚が横にずれていく。その後ろには小さな穴があり、カノンがそこに手を突っ込んで何かが入った袋を取り出した。

「ここに私たちの旅に必要な最低限必要な物を準備しておきました！」

「嘘でしょ」

「うわあ。すっごーい」

なんとなくだけど私と先生の驚いているところは違うんだろうなあ。なんて動く本棚を見て驚いている先生を見て、そんな場違いな事を考えてしまうくらいには今私の頭は混乱していた。

「さあー急いで隠し通路から外に出してしましましょう！あそこは普段兵士がいないので出ていくならあそこが一番です！」

「う、うん」

カノンはそう言うや否や隠し通路を隠している本棚を動かし始めた。

私はカノンから受け取った袋を背中に背負うと一度先生を見る。

「先生、その」

「うん。気をつけてねえ。あまり先生らしい事は出来なかったけど、また出会える事を願ってるわあ」

「はい！ありがとうございます！」

そう言っただけで私は先生に頭を下げる。本当に短い時間だったけどこの先生にはもう一度会える事を私も願おう。

「桃花！準備ができました！行きましょう！」

「うん！わかった！それじゃあ、先生、行ってきます！」

「うん！行ってらっしゃい！」

「……さて、と」

桃花もカノンもいなくなった図書館。そこには人影が一つ。

その人影は、誰もいない筈のその場所で口を開く。

「いますよねえ。隠れてないで、出てきたらいかげすかあ？」

彼女がそう言うのと誰もいなかった筈の彼女の周りに人影が五つ。姿は黒装束に包まれておりその手にはナイフや先の鋭い針が握られていた。

その中の一人が声を出す。

「……よく気づいたな。驚いたぞ」

「うふふ。そんなお粗末な気配遮断で隠れているつもりですかあ？だとしたら貴方たちは【暗殺者】に向いてませんよお」

「……ふん。口は回るようだがそんな安い挑発には乗らん。大方時間稼ぎでもするつもりなのだろうが、隠し通路の出口には私たちの仲間

がいる。姫は捕まり、その付き人の勇者は死んで終わりだ。そして、
貴様もな」

「……ふ、ふふふ。うふふふふ」

黒装束が言い終わると囲まれている女は突然笑い出した。その笑い声は本当に楽しそうで、面白そうで、愉快そうであった。しかし、だからこそ女を囲んでいる五人は言いようのない恐ろしさを感じたのだった。

「何がおかしい」

「ああ、いえ。別に。ただ、貴方たちは幸せだなあ、と」

「何?」

「もしもこの場に彼がいたら貴方たち、今頃首から上が体とお別れしてましたよお?」

「なにを言っている」

「ああ、それとお、貴方たちのお仲間さん?でしたっけ。入り口で待っているって言う」

「それがどうし……」

「それってこの方たちですかあ?」

「……は?」

それまで落ち着いていた黒装束全員からそんな声が漏れた。

しかしそれも無理ないだろう。突然彼女の隣の空間が歪んだと思ったらそこから隠し通路の出口にいる筈の仲間たちが出てきたのだから。

……頭だけの状態で。

「ああ。良いですね。その表情。やはり人間はそういう表情が一番似合いますよお」

「これは、一体?どうして」

「うん?ああ。なんか出口に集まっっていて邪魔なので駆除したんですよ。せっかく彼の妹とお姫さまが歩く場所なのに、こんなのがいたら嫌でしょう?」

「き、貴様あー！」

そう言うのと同時に女を囲んでいる五人は一斉に女に飛びかかる。しかし女はそんなこと関係ないと言うように話し続ける。

「つと。いけない、いけない。無駄話が過ぎましたね。私もそろそろ動かないと。彼女たちに追いつけなくなっちゃいます」

女はそう言うときにも自身に刃を振り下ろそうとする黒装束に笑みを向ける。それはもう、とびきりの、十人中十人が見惚れそうな程美しい笑みを。

「それでは皆さま、

さようなら」

その図書館には人影が一つ。

しかし先ほどと違う点がいくつか。

まずその人影の目の前に積み上がった無数の人間の頭。

そしてその人影の後ろに置かれた首から上の無い五つの体。

そして……

「さて、私も行きますようかねえ。……はあ。暫く会えませんねえ。早く会いたいものです。」

英雄。そして魔王」

黒い羽を背中から生やし、血に濡れた鎌を担いだ女が一人、天窓から降り注ぐ月の光に照らされていた。